

第28回
自治労
文芸賞

散文の部

審査委員紹介

第28回自治労文芸賞の小説・ルポルタージュ・紀行文など
散文の部審査委員は次のみなさんをお願いしました。



鎌田 慧さん

社会派ルポライター。近著に「さ
ようなら原発の決意」「狭山事件の
真実」など

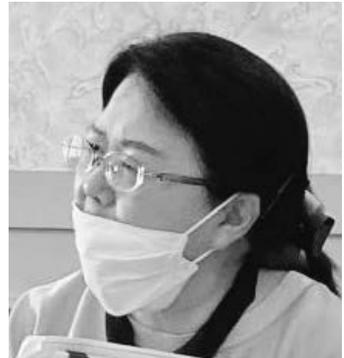
増田みず子さん

86年「シングル・セル」で第14回
泉鏡花文学賞受賞。著書に「月夜
見」など



道浦母都子さん

歌人。歌集「無援の抒情」で第25
回現代歌人協会賞を受賞。近著に
エッセイ集「たましいを運ぶ舟」



自治労文芸29

もくじ

写真

第29回写真コンクール受賞作品……………5

自治労文芸賞

第28回自治労文芸賞・入賞者一覧……………16

散文の部

本選考座談会・散文の部審査……………17

片桐さんと散歩……………(入選) 橋本 春樹 自治労校方市職賞関係労組……………21

死よりよみがえりし人 ルカ町田宗賀シヨアンの生涯……………(佳作) 浅香 恵 小矢部市職・退職者……………38

コロナパンデミックと社会的影響 都営神保町駅を事例として……………

……………(奨励賞) 飯野 裕史 東京交通労組……………51

散文の部・作品短評……………59

無題 (選外) 山崎 久子 長野県組合員家族 90

川柳

川柳の部：審査員 島田駱舟 選評 91

凧の海 (入選) ※綿谷夕雨子 今別町職・退職者 93

いつか土 (佳作) ※柳谷たかお 外ヶ浜町職・退職者 94

ほほえみ (佳作) 中川 潔 福井県職・退職者 95

無題 (佳作) 田中 良積 釧路市後所三才・退職者 96

まんが

2020まんが大笑・入笑作品 98

高橋誠／井家利之／仲澤結絵／吉本和弥／松本高德／渡部統明／大西英
剛／澤井康樹／ヨッシー・イリエ／喜多眞生／大植賢／相澤まさ子／塚
本吉典



「刀鍛冶」

荒川 由香（福島県本部・福島市役所職員労働組合）

地元で開催された日本刀作刀実演のイベントで撮影された作品です。モノクロの画面全体の中に、激しく燃え上がるオレンジ色の炎と刀匠を包む火の粉、そして彼のまなざしが作品に力強さを与えています。おそらく、モノクロとカラーのカットを画像編集ソフトを使用して後処理した写真と思われます。（間違っていたらごめんなさい）基本的にはストレート写真が望ましいのですが、それを超える新たな写真の可能性を感じさせる作品です。



「暴れ泣き」

松下 高之（兵庫県本部・伊丹市職員労働組合）

地元兵庫県の越木岩神社で開催された泣き相撲の一幕です。大泣きしているお子さんは撮影した松下さんの息子さんとのことです。エピソード欄には「決まり手は暴れ泣きかな」と書かれています。お相撲さんたちの顔を入れず、両脇の人の膝は入れています。大きな体をバックにして、子どもの全身を入れたことによって、その小ささが強調されています。画面の切り方が非常に上手いです。さらにその表情が、愛おしさを感じさせます。



「お姉ちゃん」

木谷 昌経（山梨県本部・中央市職員組合）

木谷さんのお子さんたちを写した作品です。長女は妹が生まれる前から妹の世話をイメージして、ぬいぐるみで一生懸命練習していたそうです。そして今は、実際に妹の面倒を見ているとのこと。この写真の良さは、おぶりながら妹を見つめる姉の真剣な視線と妹のあどけない表情です。そして、背景を強くぼかしたことで、画面の中で二人をより強く印象づけています。優しさと愛情にあふれた作品だと思います。





「インパクト」

浅田 幸広（北海道本部・苫小牧市スポーツ協会職員労働組合）

野球のバットにボールを当てる瞬間をとらえた写真です。エピソード欄には、バットに当てるまで目を離さないことが打撃技術を向上させると説かれています。この作品は単純に見えますが、このような瞬間をきれいに撮るには相当な撮影経験が必要です。この写真の背景には多くの失敗作があると思われる。バッティングの技をとらえていますが、撮影者の写真の技を感じさせる作品です。



「空に描く」

西川 喜博（三重県本部・三重県職員労働組合）

アクロバット飛行のワンシーンを撮影した写真です。かなりのスピードで飛ぶジェット機にピントをあわせながら画面上の位置も意識する、そう簡単にできる撮影ではないでしょう。ジェット機とスモークとの構図上のバランスが良く整えられています。そして、円を描くスモークが二重であるため、アクロバット飛行の連続性とスピードも感じられます。難しい被写体を瞬時に上手くまとめた作品です。





「祭のひとつき」

後藤 俊夫（北海道本部・函館市役所職員労働組合）

北海道江差町の祭で、参加者や山車が町のあちこちで休息をしている時に撮影されたそうです。エピソード欄には、はるか遠い江差を感じたと書かれています。高台に座る古い装束をまとった二人の女の子と横笛を吹く少年？の後ろ姿、背景の海と山が上手くマッチしています。シーンを上手く押さえた写真です。個別のものを見るよりは、写真全体で感じる作品になっており、そこが時間を超える感覚に誘います。



「向日葵と彼女の後ろ姿」

仲鉢 涼介（北海道本部・芦別市職員労働組合）

向日葵の作付面積が日本一の北海道北竜町で撮影されました。全体が向日葵で埋め尽くされ、その中で人々が三々五々、花を見て回っています。まず、写真全体に広がる向日葵の黄色が作品に強い印象を与えています。さらに、人々を絶妙なバランスで配置し、とくに写真上部に人と小径を入れたことで、絵になりすぎないリアリティを写真に加えています。シャッターチャンスを逃さない技術がこの構図を生み出しました。





「注目の的」

まどろ
間處 俊彦（広島県本部・世羅町職員労働組合）

伊丹空港の側の千里川土手で撮影された作品です。エピソード欄には、家族連れ、カップル、仕事帰りのサラリーマンなどさまざまな人々が訪れると書かれています。飛行機を真ん中に置き、その下にいる人たちを上手く配置したバランスの良い構図になっています。また、広角レンズを使用したことにより、遠近感も強調されて迫力のある画面に仕上がっています。



テーマ部門「技」とチャレンジテーマ部門「姿」の2部門で作品を募集した「第29回写真コンクール」。「技」には44作品、「姿」には55作品の応募があった。7月22日に審査が行われ、各部門から4作品が受賞した。

総評

テーブルの上には写真が整然と並べられていた。私はいつものように、二つのテーマ別に並べられた作品を端からゆっくりと見ていった。3回ほどこれを繰り返し、印象に残った写真をピックアップして、テーブルの空いているスペースに置いた。ここで初めて写真を手に取り、コメント欄などを読んだ。これが審査をするときの私の流儀だ。審査はスムーズに進んだ。改めて選び終わった8点の作品を見ても、これらの作品で良いという思いは変わらなかったが、何か引かかる気がした。そんな時、スタッフの方が、選んだ作品の一枚を指してその写真の良さを尋ねた。私はその良さをとくとくと語った。その上、聞かれてもいない写真まで解説していた。そして撮影者の確認などをしていたら意外なことが判明した。過去にも入選した人がかなりの割合で選ばれていたのだ。引っ掛

かりの正体がわかったように思った。

私は画像の持つ強い印象を中心に作品を選んでいたので。写真は、被写体を記録することと表現することが同時に行われる。この両面を常に意識して、私は今まで審査を行ってきたつもりでいた。しかし今回は、上手い写真、といった写真の表現に重きを置きすぎていることに気づいた。かといって、今回選んだ写真に内容がないという訳ではない。つまり内容が良くても撮り方がいまひとつだとなかなか選べないのだ。まるで反省文のようだが、応募する皆さんに審査の中での思いを一度伝えておきたかった。とにかく応募する皆さんは、上手い下手にとらわれず写真を撮って、その思いを作品にしてほしい。選ぶ側もそれらを受け取りながら、考え、感じながら、写真の記録性と表現性の両面を意識して、今後も審査に望むつもりだ。

審査員

鈴木 邦弘さん
(写真家)

雑誌を中心にフリーの写真家として活動。自治労通信および『世界』などにドキュメンタリー写真を発表。93年「森の人・PYGMY」で第18回伊奈信男賞を受賞。日本写真芸術専門学校主任講師。日本写真家協会（JPS）会員。自治労情宣セミナー分科会講師。

自治労文芸 第29号

第28回

自治労文芸賞 受賞作品集

第28回自治労文芸賞・受賞者一覧

散文の部

入選 『片桐さんと散歩』

橋本 春樹 大阪府本部・自治労枚方市職員関係労組

佳作 『死よりよみがえりし人』

ルカ町田宗賀 ジョアンの生涯

浅香 恵 富山県本部・小矢部市職・退職者

奨励賞 『コロナパンデミックと社会的影響 都営神保町駅を事例として』

飯野 裕史 東京都本部・東京交通労組

詩歌の部

詩／審査員・山田 隆昭さん

佳作 『ベンダゴ』

齋藤 新一 栃木県本部・宇都宮市職労・退職者

佳作 『言の実』

半田 一緒 *北海道本部・美瑛町職

短歌／審査員・森川 多佳子さん

入選 『日常』

米谷 茂 大阪府本部・泉佐野市職・退職者

佳作 『除外例なく』

鈴木 照夫 東京都本部・都庁職・退職者

佳作 『柘榴の実』

山崎 俊定 東京都本部・都庁職・退職者

奨励賞 『思い出』

山田 裕子 富山県本部・市立砺波総合病院労組

俳句／審査員・小沢 信男さん

入選 『2020年春から夏へ』

桐原 則介 *福井県本部・全国一般福井地方労組

佳作 『つまらないバツタ』

瀬角 龍平 鹿児島県本部・垂水市職労・退職者

川柳／審査員・島田 駱舟さん

入選 『風の海』

綿谷夕雨子 *青森県本部・今別町職・退職者

佳作 『いつか土』

柳谷たかお *青森県本部・外ヶ浜町職・退職者

佳作 『ほほえみ』

中川 潔 福井県本部・福井県職・退職者

佳作 『無題』

田中 良積 北海道本部・釧路市役所エニオン・退職者

*はペンネーム

散文の部審査

出席者

鎌田 慧 さん
増田 みず子 さん
道浦 母都子 さん
司会 佐藤 環 樹
自治労文芸代表幹事

2021年7月29日 新横浜グレイスホテル

佐藤 応募作品は前々回が28作品、前回が26作品そして今回は17作品と減っています。その原因として、自治体職場に余裕がなくなっていることが大きいと考えています。公共サービス職場は、ただでさえ人員削減されている中で、さらに新型コロナウイルスへの対応業務が出てきました。医療だけではなく戸籍の窓口担当なども新型コロナウイルスの現場に駆り出されている現状でして、散文を書く時間を確保するのが難しかったのではないかと思います。応募のあった17作品から自治労文芸会議幹事による予備選考で6作品に絞

り、本日の最終選考の対象となりました。

それでは、最初に、作品の批評をいただき、その後、受賞作を決定していきたいと思いますので、よろしくお願いします。

道浦 池田祐人さんの「牛鬼」は九鬼水軍を題材にしていると思いますが、九鬼氏は熊野本宮大社の神官が子孫で、九鬼水軍は強力な水軍でした。九鬼氏や熊野詣、熊野に伝わる鬼伝説などエピソードはたくさんあるため、もう少し深掘してほしかったです。

増田 対象作品のうち、橋本春樹さんの「三人の『あおい』と僕」、
「片桐さんと散歩」の2編に、小説の「にょい」を感じました。

「片桐さんと散歩」は面白く読みました。最初の部分「お芝居風の物語がこれから始まるよ」という「見栄」を切っている感じがしましたが、それ以外は読んでいて心地よさを感じました。片桐さんとの関係性がさらりと描かれ、積極的ではない人同士の交流には物語としての進展がないのは仕方ない部分があるかもしれません。

鎌田 「三人の『あおい』と僕」、「片桐さんと散歩」を読み、後者の方が濃い世界観を有していると感じました。図書館という職場に根差し、本を媒介として世代が違う人たちの人間関係が卓抜に描かれています。

浅香恵さんの「死よりよみがえりし人 ルカ町田ジョアンの生涯」は、敢えて細かい描写を削り取る筆致が印象を強くして効果的だと感じました。最後まで一気に読むことができました。

道浦 私も「片桐さんと散歩」を推します。職場のことを書いているので自治労文芸の趣旨を理解して書いていると思います。

中学校のラグビー対抗試合に出場するまでの過程と試合当日の



最終選考の様子

様子を描写した東野正さんによる「雨の祝祭」について、ラグビーに明るくないであろう教師がラグビー経験のない生徒で構成された素人集団を教え、短期間で試合に出場する物語に現実味の乏しさを感じました。

増田 私も「雨の祝祭」を読んで、道浦さんと同じ感想を持ちました。読み手に「素人チームが対抗試合に臨むことにリアリティを感じない」と言わせないくらいのストーリーを書いてほしいですね。

道浦 ルポルタージュ作品である飯野裕史さんの「コロナパンデミックと社会的影響 都営神保町駅を事例として」は、前半部分は報道されている事実を記しています。駅中にあるパン屋と花屋にせっかく取材しているのですから、ここをしっかりと描いた方がよかったのではないかと思います。

鎌田 この作品は、締め切りのかなり前から書き始めたとすると、その頃の解説を丹念に追いながら書かれたのですが、今すでに共通認識となっている事実が書かれているため、損をしてしまう。時事的な題材で、一時的なものであっても記録性が強く刻まれていけば、大きな意味がありますが、現在進行形のものですと、それほど大きな意味を持たなくなります。ただ、職場である地下鉄の駅で観察したことを書き留めるのはとても重要なことです。作品の半分をコロナの解説が占めているため、あとは構成のバランスですね。現在のテーマに果敢に挑戦していてもいいのですが、取材先のお店が2つだけだったのが残念でした。

増田 神保町駅には他にも多くの店があるので、ちょっと物足りないですね。鎌田さんをご指摘の通り、前置きとしてのコロナの

状況部分が長い。書くための準備としてこの部分には必要かもしれないですが、それを切り落としていく作業も重要だと思います。

佐藤 事前の予備選考では、さらに取材を重ねた上での続編を期待する声がありました。

増田 20年先の未来を書いても、そこを過ぎてしまうと誰もその先見性に気づかない。時事を小説の題材にすることは難しいですね。

鎌田 現実の方が先に進んでしまうこともありませんが、パンデミックや新型コロナウイルスに関する本はたくさん発行されているため、少し違った視点、つまりは地下鉄職員の立場から見えてくる世界を書いてほしいですね。駅で働く同僚の声や、その後お店の人たちがどうなっていたかなどを書き加えてもよいと思います。

佐藤 では、審査の結果発表をお願いします。

鎌田 増田さん、道浦さんとの審査を踏まえ、審査員を代表し最終選考に残った6作品から、入賞は「片桐さんと散歩」、佳作は「死よりよみがえりし人 ルカ町田ジョアンの生涯」、奨励賞は「コロナパンデミックと社会的影響 都営神保町駅を事例として」とします。

佐藤 最後に次回の文芸賞にむけたメッセージをお願いします。

鎌田 自治労の職場にはさまざまな職種の人っていて、職員の中にはいろいろな部署を経験する人もいます。



鎌田 慧さん



増田 みず子さん

よう。また、新型コロナウイルスの対応において、自治体労働者ならではの体験もあったはず。社会の重要な部分を構成する自治体労働というものを再発掘してほしいです。今回入賞した作品は、図書館などを舞台としなが

ら、本と人間の関係を見ていくというユニークな視点があります。自治労文芸賞は職場の状況を描きながら社会と労働の関係をみていける、極めて貴重な文学賞です。格差や貧困、差別そして環境汚染や温暖化、職場や仕事に関わる社会性など、多くの重要なテーマが自治労の職場に存在します。そうしたテーマで書いてほしいです。それが自治労文芸に対する期待です。

増田 難しいと思う問題を頑張って書いてほしいですし、こういうことが難しいことであるのかを考えてほしい。自治労組合員である公共サービスに従事する人とそうではない人は、小説を書く上で根本的に違うものがあると常々感じているのですが、それが何かはまだよく分らないです。ただ、自治労組合員ではない人は「できることを探しながら日々暮らしている」のですが、自治労組合員は「自分で獲得した職場で働いている」という意識を持っている人が多い印象です。何か問題が発生した際、自分を中心として展開する作品が自治労文芸には多い気がします。一般的に考えられる小説の展開とは違っていて、そこが面白いと思います。



道浦 母都子さん

道浦 公共サービス職場にある大変な課題について書いてほしいですね。今回入選した作品で取り上げられた図書館についても非正規化が進み、労働条件に係る問題もあります。そうした部分も拾って書いてほしい

です。

佐藤 新型コロナの対応で公共サービスの重要性が改めて社会に認識されてきていますが、公共サービスに横たわる課題を作品に反映していくことが大切だと考えています。また、自治労文芸賞に若い世代からの応募が増えてきていますので、自治労文芸会賞としても積極的にアピールに努めていきたいと思っています。本日は、ありがとうございます。



片桐さんと散歩

大阪・自治労枚方市職員関係労組

橋本 春樹

最初にお断りしておきたい。

僕が今から書くこうとしているのは短いフィクションだ。日頃、文章を読み慣れていない人でも、読み終えるまでに一時間もかからないだろう。そういう意味では良いフィクションになると思う。時間は誰にとっても大切なものだ。あなたが何故、これを読もうとしているのかはわからない。おそらく然るべき理由があって、読まなければならないのだろう。僕の書いたフィクションを読むのに、一時間以上もあなたの時間を割いていただくのは申し訳ない。

あともういくつか、あらかじめお伝えしておきたい。

このフィクションの中で恋は芽生えないし、愛も失われぬ。ラストにドラマティックなどんでん返しがあるわけでもなければ、

ば、ミステリーやサスペンスの気配もない。つまり、多くの小説に当たり前のように含まれる要素はなにひとつとしてないということだ。それと、そもそも僕にしても、これを書こうとしている人につくられた存在だ。

最後にもうひとつだけ。これは最初、ノンフィクションとして書いた。だが、書き上げた原稿を読み返すと、なにもかもが書ききれていなかった。「事実」という唯一の強みであるべきはずのことが、なんらリアルさを伴っていなかった。何度読み返しても、言葉の連なり以上のものを読み取ることができなかった。僕が伝えたいことは言葉の連なりの向こう側にある。

前置きが長くなったが、つまりこれはノンフィクションをリライトしたフィクションだ。

*

図書館の蔵書用に発注するための選書リストの中で気になる本があると同僚から相談を受けた。選書基準で引っかかるかどうか、現物を見てみないと判断がつかない。インターネットで検索すると、私の自宅近くの書店に在庫があることがわかったので、確認してきてほしいということだ。自宅近くといっても、自宅の最寄りのバス停からふたつ先のところだ。確かオープンして半年ほどになる。いずれはと思っていたが、なかなか足が向かなかつたので、ちょうどいい機会だと思い、引き受けた。

来年の三月に定年を迎える。希望すれば六十五歳まで雇用してもらえろが、辞めることにしている。ずっと独り者だし、贅沢もしてこなかったから、経済的にも問題はない。

定年後は安い宿を泊まり歩いて、国内をまわるつもりでいる。行き当たりばったりの旅先で図書館を見つけ、出入り口の写真を撮る。外からと内からの二枚。

図書館の中と外はまったく別の世界だ。図書館の中には様々な知が体系的に存在している。そして外の世界には様々な知が混沌と存在している。図書館の出入り口は、その境界線だ。図書館の中に入る時、図書館から出る時、空気が一変することに気がつ

かない人はいないだろう。

バスを降りると、冷たい風が幾分強さを増していた。白い息があつという間に空気に溶けていく。

書店はバス停の目の前。思っていた以上に大きい建物で、駐車場も広い。隣にはカフェがある。

*

「いらっしゃいませ」

一日に何度この言葉を口にするだろう。店内の静寂を損なわない程度の声で。

義務的な声は出さないように心がけているつもりだ。ここに来て良かったと思わせる、少なくとも招かれざる客ではないことを伝える声を出す。難しいことではない。親しい友人と十年ぶりに再会するよう場面を想像すればいい。

ただ、私にはそのような友人などいない。私との逢瀬を心待ちにする恋人も。

家族とも疎遠のまま。両親には家業の食堂を継ぐことを望まれている。田舎には一軒しかない食堂で、昼から酒を飲む男たちが賑わっていた。高校から帰ると仕事を手伝わされたが、酔っぱらいの猥雑さには心底うんざりした。煙草と酒の匂いが嫌で仕方

なかった。それに私に投げかけられる卑猥な言葉。身体を触られたこともあった。耐え切れなくなったら店の奥でひとり泣いた。

でも、両親はいつも見て見ぬ振りを決め込んでいた。

高校卒業後は都会の大学に進んだ。大学を卒業したら帰郷することが条件だったけれど、就職して社会経験を積みたいからと、半ば無理やりに両親を説得した。今でも時折電話がかかってくる。早く結婚して帰ってこい。婿養子は調理師免許を持っている人がいい、などと好き勝手なことをいう。両親と話していると、実家の食堂の猥雑な雰囲気と身体中を覆われる錯覚を覚える。煙草と酒の匂い。卑猥な言葉。両親の身体を案じる言葉はひとつも思いつかない。

最初に就職したのは小さな出版社だった。起業家向けの本を専門に出版していた。時代の流れに合い、売り上げも悪くなかった。

けれど、事業を起こして成功する人はほんのひと握りだし、成功を続けることができる人はもっと少ない。

成功者は語る。

——うまくいかないところに目を向ける。それが成功の秘訣だ。

この手の本には必ずといっていいほど失敗談が語られる。読み手は自分の人生に重ね合わせながら失敗の先にある成功を想像する。

けれども真似事で成功は掴めない。その教訓だけを得て、退社

した。

両親は、いい機会だからすぐに帰ってこいと毎日のように電話をかけてきた。それから逃げるように旅に出た。安い宿を探しながら、気の赴くままに国内を巡った。

自分探しの旅などと格好をつけるわけではないけれど、成功を夢見て起業しようとする人が羨ましく思えた。旅先の景色は濃いスクリーントーンをかけたみたいにくすんで見えたし、なにを食べても味気なかった。

手持ちのお金が少なくなってきたところで、今の書店に就職した。どうせ働くのであれば、本に関係のある仕事に就きたかった。

履歴書は必要なく、指定された日時に会社に行くと、受付の女性に狭い会議室に通された。

机の上に一冊の絵本が置いてある。

「どうもどうも」

今しがた昼休みに蕎麦屋から戻ってきたばかりといった感じの男が入ってきた。

水色の生地と黄色い斜線の入ったネクタイ。眼鏡のレンズは薄紫。あまり手入れされていない口髭が癖のある性格の持ち主であることを連想させた。

「カタギリさんでしたっけ？」

「カタキリ、です」

いつも間違われるから慣れている。でも、訂正しないわけにも
いかない。

「ほう、珍しい。濁らないんだね」

「たまにカタクリとかカマキリとかいわれることもありますか
ら、カタギリなんて上出来です」

つまらないことをいってしまった。

「申し訳ない」と、ほんの一瞬だけ彼は神妙な表情を見せたが、
すぐに事務的な口調に戻った。

「さて、この本を売るためのポップカードをつくってみてほし
い」

彼は含みのある笑みを浮かべた。あとで知ったのだけれど、彼
は社長だった。

机の上には本のほかに、名刺をひとまわりほど大きくしたサイ
ズの白いカードが細い輪ゴムで束ねて置いてあった。その横には
黒色のボールペンが一本。

「できたら声をかけてください。隣の部屋にいますから」といっ
て、彼は部屋を出ていった。

堅苦しい面接を想像していた私の緊張は、彼が部屋のドアを閉
める前に消えていた。

試されているのは間違いない。本を売っていくらの書店だ。確
かに履歴書は必要ない。本を売る力量を見極めるには、このやり

方は手っ取り早い。本の横にお勧めのコメントを短く書いたカー
ドを添える。いわゆる販売促進ツールのひとつだ。前に勤めてい
た会社でも同じようなことをした経験がある。何冊かではある
が、本の帯の文面を任されたことがある。起業関連の本だから、
成功に導く言葉を本文から引っぱってくるだけのことだったけれ
ど。

用意されていたのは『100万回生きたねこ』というタイトル
の絵本。佐野洋子の作品で、日本を代表する絵本でもある。何故
か実家にあった。読み聞かせしてもらった記憶はない。たぶん
良い絵本だと評判だから母が買い求めたのだろう。輪廻転生を繰
り返すねこの物語だ。高校生の時分になっても読み返すことがあ
った。何度読んでも飽きない。優れた絵本に共通して言えること
だ。

本を読むことが好きだった。正確には、本を読んでいる間だけ、
目を背けたい光景や耳にしたくない言葉から解放された。現実逃
避そのものだ。けれど、私にはそうした時間が必要だった。

ページをめくりながら、思いつくままに三枚のカードをつくっ
た。

—100万通りの読み方がある。
—久し振りに読んだ。涙がとまらなかつた。

—もしも生まれ変わることができたとしても、この人生を歩みた
い。

しばらく考えてから二枚目と三枚目のカードを折り畳んでポケットに入れた。それらは使い古しのティーシャツのようにくたびれた感じがした。

「100万通りの読み方がある」

手元に残ったカードを読み上げた。新鮮味に欠けるかもしれないが悪くはない。

カードを持って、隣の部屋の扉を叩いた。扉には社長室と記されていた。

「早いね」

カードを受け取った彼の目が素早く文字を追った。そして彼の視線はすぐに私に向けられた。

「カードが本を売るんじゃない。カードをつくる人が本を売る。小手先でつくったカードなんて誰も立ち止まって見やしない。でも、君のカードなら、少なくとも立ち止まって本を手に入れてくれると思う」

採用はあっけなく決まった。

翌日から勤務する店の地図と、連絡先を書いた紙を渡された。

*

「いらっしゃいませ」

透明感のある女性の声が心地よく耳に響いた。私と彼女との距

離は十メートル程。それでも不思議と静寂を損なうような声ではなかった。

店内にBGMは流れておらず、開館中の図書館よりは、よっぽど静かだった。図書館のカウンターでの利用者とのやり取りは、時に耳障りに響くことがある。特に日曜日や祝日になると利用者でごった返し、バーゲンセールの場合に似た雰囲気になることもある。

だが、唯一、開館前と閉館後の閲覧室の静けさは格別だ。贅沢すぎる静寂といってもいい。ひとりで閲覧室を気の向くままに散歩をしていると、静寂の中に溶け込んでいきそうな錯覚を覚えることがある。定年退職を迎える時、これからはもうあの静寂を味わえないと思うと、さぞかし名残惜しさが募ることだろう。

午後九時過ぎと遅い時間ではあるが、ざっと見ただけで二十人ほどの客がいる。スーツ姿のサラリーマンと、塾帰りだろうか、制服姿の高校生が半分半分といったところだ。

まず頼まれていた本を探そうと、客用の検索端末に向かった。床にはグレーのカーペットタイルが濃淡で交互に敷き詰めてある。生地は足音を抑える素材のもので、店の気配りを感じた。以前、出張の際、時間潰しに立ち寄った書店は木製の床だったため、客の歩く音がひどく耳障りに感じたものだ。

検索端末のA4ほどの大きさのタッチパネルを前にして、書名

を書いたメモを取り出そうとポケットに手を入れた。ところがメモがない。作業服のポケットに入れたまま着替えてしまったようだ。メモがあるからと、はっきりとした書名は覚えていない。思いつく限りの単語を入力したがヒットしない。せめて著者の名字だけでも覚えていればと悔やんだが仕方がない。頼んだ職員に電話をかけたが、あいにく留守番電話になっていた。

店の人に尋ねてみることにした。職場では声をかけられる側なので、逆の立場ということになる。

「いらっしやいませ」

カウンターに向かう私にかけられた声は、店内に入った時に聞いた声と同じだ。

身長は私と同じくらいある。私は百七十六センチメートルあるから、女性では背が高いほうだ。長く艶のある黒髪はブルーのリボンで、うしろで丁寧に束ねられている。リボンのブルーは、フェルメールの絵に象徴される色を連想させた。透明感のある白い肌と黒とブルーがほどよく調和している。裾が短い黒の布エプロンを細い腰に纏っている。それに皺ひとつない真っ白なブラウス。年齢は三十代の前半くらいだろうか。全体的に落ち着いた佇まいとの印象を受けた。

私が事情を話すと、彼女は言葉を探すように、瞳を左右に幾度か動かしした。そして、事務用の端末に文字を入力した。一回目は見当が外れたようで、下唇を少し噛んだ。そして二回目。

片桐。

手持ち無沙汰な私は彼女の胸元につけられた名札を見た。文字の上に小さく、KATAGIRIと、そして肩書きにはフロアマネージャーと印字されていた。KATAGIRIとは濁らない。

「ご案内いたします」

そういつて片桐さんはカウンターから出てきた。五回目の検索で目当ての本を見つけたようだ。私は軽快に揺れるポニーテールを見ながら続いた。

けっこうな距離を歩いた。なにしろテニスコートなら六面ほどはとれそうな広さである。ちょっととした散歩のようなものだ。

目的の書棚はカウンターから、最も離れたところにあった。書棚の前に着くと、片桐さんはすぐに目的の本を抜いて渡してくれた。

表紙に書かれた書名を確認して、それが探すべき本であることを読み出した。

「ありがとう。でも申し訳ない。どうしても見る必要があるんだけど、買うかどうかはわからないんだ。というか、買わないと思う」

余計なことをいってしまった。お礼だけで済ませれば良かったのに。自分の馬鹿正直さに呆れた。

すると片桐さんは小さく笑った。

「もちろんです。それはお客様にお決めいただきます」

そういつて片桐さんはカウンターに戻っていった。

その本は選書基準をクリアしていた。哲学関係の本だが、読者を極端に限定するような専門書ではなく、市町村の図書館に一冊はあってもいい。明日、同僚にそのことを伝えればいい。その日のうちに発注すれば一週間以内には本が届き、分類ラベルを貼り、専用のシートでコーティングし、書誌データを図書館システムに登録し、貸出できるようになる。

書棚に本を戻し、片桐さんにひとこと声をかけて帰ろうと、カウンターに向かった。

私に気づいた片桐さんが笑みを浮かべた。

「さっきはありがとう。参考になりました」

「その言葉を頂戴しただけで十分です」と片桐さんは軽くではあるが、丁寧な頭を下げた。

「お近くの方ですか？外は随分冷え込んでいますから、風邪などひかれませんかように」

「ありがとう。歩いて帰れるくらいのところだけど、隣のカフェであたたかいものでも飲んでから帰るよ」

店を出ると、さらに風が冷たさを増していた。足早にカフェに入り、エスプレッソを注文した。四人掛けと二人掛けのテーブル

がそれぞれ五つ。カウンター席もある。閉店時刻は書店に合わせ午後十時。先客はネクタイの首もとを弛めた若いサラリーマンが一人だけ。足を組み、新聞を広げている。厚みからして朝刊だろう。会社か営業先での話題を復習でもしているのか、それとも求人欄でも見ているのか。感情が窺えない表情からは推察するしかなかつた。

書店側の席に座った。四人掛けの席だが、もちろん誰に気兼ねをする必要もない。書店と接する部分は透明なガラスになっていて、店内の様子が見える。

エスプレッソを飲みながら、片桐さんをぼんやりと見ていた。可愛らしいとか美しいといった言葉はどうも似つかわしくない。第一印象の落ち着いた佇まいのなかにも凛とした存在感を感じた。

凛とした。
そんな表現がしっくりとくる。だが、近寄りたたい印象は受けない。

それに彼女の瞳の動きが気に入った。彼女の瞳はただぼんやりと客を待つ店員のそれではない。探しものをしている客がいないか、書棚の本に乱れているところはないか、常に周囲に注意を払っている。

もしも彼女がこの店にいなければ、いくら本の品揃えが豊富だったとしても、なにか物足りなく感じるだろう。

ふと、片桐さんと目が合った。微笑みながら胸の前で手を小さく振ってくれた。私もぎこちなく微笑み、手を振った。

*

閉店時刻まであと十五分ほど。

この時間になるとお客さんもさらに少なくなる。塾の帰りに暖をとりながらひと休みといった感じで、スポーツかなにかの雑誌を読む高校生。酔い覚ましにぶらぶらと店内を歩き、たまに本を手にとり、パラパラとページをめくるだけで、すぐに書棚に戻すビジネスマン。

何故だろう。

この時間帯の彼らの表情は一樣に感情が希薄だ。もっといえば、生気が感じられない。大袈裟に表現するならば、行き場のない死者が意味もなくさまよっているみたいだ。彼らはどこから来て、どこへ帰っていくのか。その過程で、なにを求めにここへ来たのだろうか。ここがなければ、彼らに立ち寄る場所はあるのだろうか。もちろん答えはない。そもそも私にしても、ここになんかを求めているのかなど、はっきりと伝えることのできる言葉を持たない。

買わない本を探しに来たお客さんは初めて見る顔だった。少な

くとも常連ではない。年齢は父より少し若いくらいだろうか。白とグレーの入り交じる硬そうな髪。痩せた身体に纏う黒いダウンジャケット。黒縁の眼鏡の向こうの瞳は、いつも探し物をしているような注意深さを感じた。それなのに全体の雰囲気は落ち着いた印象だ。話し方には誠実な人柄が窺えた。瞳だけが夜の肉食動物、あるいは彼らに狙われる動物のように注意深い印象を受けた。日中の時間帯にも彼のようなタイプの客は見かけたことがない。

今日の売り上げリストを確認した。

漫画、雑誌、文庫、学習参考書、ビジネス書。いつもより少し売り上げが伸びたのは、今日が発売日の雑誌が多かったからだ。本部とつながっている専用の端末で補充が必要な雑誌のタイトルと冊数を入力した。こうしておけば、明日の開店前には店に届けられる。

ふと顔をあげるとカフェに彼の姿を見つけた。こちらを見ている。

小さく手を振った。

普段そうするのは小さい子ども相手の時くらいだ。でも、何故だか彼には親近感を覚えた。私と似たような空気感があるからだろうか。私の瞳も彼のように夜の動物のような動きをしているのかもしれない。

彼も手を振ってくれた。私と同じように小さく。

店内に視線を戻すと、平積みにしてある新刊の文芸書のコーナーが少し乱れていた。わざわざ表紙を見せて置いているのだから、きれいに整えておかなければならない。

整理して、もう一度カフェの方に目を向けると、もう彼の姿はなかった。

*

次の日もふたつ先のバス停で降りた。

今回も目当ての本があった。その本は同僚の通勤途上の書店にもあったが私が引き受けた。本のある空間の静寂を図書館とは違う所でもう一度味わってみたかったし、片桐さんに会いたいとも思った。

みぞれ混じりの雨が降っているせいか、店内には昨日よりも客の姿はまばらだった。前日より静けさが際立っている。雨の日特有の静けさも影響してのことだろう。それは図書館も同じだ。カウンターに片桐さんの姿はなかったが、「いらっしやいませ」と聞き覚えのある声が響いた。

「こんばんは」

うしろから声をかけられた。

片桐さんだ。

私がちょうど通りかかった辺りの書棚に並ぶ本を整えていたようだ。図書館でも欠かすことのできない仕事のひとつだ。本というものは書店であれ、図書館であれ、あるいは自宅であったとしても、しかるべき場所に整然と並んでいなければならない。本はそれ自体が独立した存在なのだが、図書館や書店ではある種の規則に従って、ひと括りのグループにまとめられる。本来あるべきところにいなければ、その違和感の波は周囲のバランスまで乱してしまう。砂の城のように脆いものなのだ。

ただ、書店の本の並び方には違和感を覚える。図書館とは異なる規則性だからだ。大まかなジャンルごとに固まっではいるが、例えば旅行書の横に哲学書が並んでいるといったふうに。図書館の配列に慣れた私を困惑させる。

けれども、間違っているとクレームをつけるつもりなど毛頭ない。ギリシャ旅行に出掛ける人が、ギリシャ哲学を学んでおこうと思いついたのなら、実に気の利いた配列ということになる。池波正太郎の小説の横に、作品の中に出てくる料理のレシピ本が並ぶように。そう考えると、図書館の分類は、あくまでも基本的なものである。確かにそうだ。共通するテーマのもとにカテゴリの異なる本を集めることで、読書の可能性は広がる。図書館でも同じようなことをしている。あるテーマを設定し、異なる分類から本を集めてきて展示する特集コーナーと思えばいい。

「今日もなにかお探ですか？」

片桐さんは本の背を書棚の前面に揃える手を休めずに、こちらを向いて微笑んだ。

料理関係の本が並んでいる書棚だった。昨日は気がつかなかったが、右の頬に小さなえくぼを見つけた。

私は頷いてから口を開いた。

「ただし」

言葉を続けようとしたら、片桐さんが割って入った。

「買うかどうかはわからない」

片桐さんは子どもがわざと悪戯を仕掛ける時のような表情をつくってみせた。

その通りだった。片桐さんは昨日のことを覚えていてくれた。

「買うかどうかはわからない」

それは口にしなくてもいい言葉で、いささか後ろめたさを感じていたのだが、気にする必要はなさそうだった。

そもそも、もう何年も本を買ったことがない。最後に買った本の書名も著者も覚えていない。

図書館で働くということは、本を読まなくなるということでもある。正確には、読めなくなる、との表現が適当だ。仕事で目を遠ざなければならぬ書類が多く、休日だからといえ、気ままに本を読む時間はない。たまたま本を読むとしたら、定期的を担当が回ってくる書評を書くために読むくらいだ。本は指定されたもので、書評は図書館のホームページで公開される。

図書館に来る実習生にも「もしも君の趣味が読書だとして、その趣味を手放したくないのなら、就職先は考え直した方がいい。図書館というところは、読書好きにとっては働くところではなく、利用するところだ」という。怪訝な顔つきをされるが、現実を教えておく親切心からのことだ。

*

彼は、参ったな、というふうに着をすくめて見せた。アメリカの映画で見かけるような、少しばかりオーバーな仕事草だったが、自分の言葉を私に先取りされたことを楽しんでるようだった。彼が目的とする本は『現代日本の社会が直面する課題を形而上学的観点から考察する』という長い書名で、サブタイトルは「悠久の歴史から人は多くを学ぶべきだが、結局のところ、あらゆる事象は繰り返されるばかりで、誰も歴史からなにも学ばない」という本だった。今回はプリントアウトした紙を手渡された。

「こちらへどうぞ」

その本の場所なら端末で調べなくてもわかる。私が最近仕入れた本だからだ。

彼と目的の場所へ向かった。今日は昨日より暇だし、ゆっくり歩いてみることにした。途中の本棚の具合も確認できる。あとで

整理しにいけばいい。

それに、彼には私と似通った雰囲気を感じる。具体的な言葉にすることは難しいが、店で毎日たくさんの人を見ていれば、なんとなくわかる。実際、彼は私が気になった書棚で足をとめ、手慣れた動作で素早く本を整えた。

*

目的の書棚は、料理本のコーナーから一番遠いところだった。二日続けてのちょっとした散歩のようなものだ。

でも図書館であれ、書店であれ、書棚の間を歩くのは、深い森の中を散歩しているようで悪くない。片桐さんがのんびりと歩いてくれたおかげでというべきかどうかはわからないが、書棚の本の乱れを手際よく整えることもできた。そうしないではいられない性格なのだ。図書館の職員であれば誰しもがそうだろう。

「もしも、買ってくださったら、この店では二冊目の売り上げです」と、片桐さんは一冊の本を書棚から抜いて差し出しながら、えくぼをつくった。

「ほう。こんなを読む人がいるんだ」

受け取った本はちょっとした辞書並みの厚みがあった。

「書く人がいるくらいですから」と、片桐さんは笑った。

「一週間前の新聞で紹介されたんです。新聞やテレビで紹介され

た本はよく売れます。だからこれも急いで仕入れました。といっても、さすがに二冊だけですけど。それでは、ごゆっくりどうぞ」
そういつて片桐さんは私に背を向け、ポニーテイルを揺らしながら歩いていった。また書棚に並ぶ本の整理に戻っていくのだろう。

歴史から学ぶべきか、学ばないか。学ぶべきであるとの答え以外は見いだせないはずだが、権力を持つ人間こそ歴史からなにも学ばない。そのことを私たちは歴史から学んだ。おそらくこれから先も同じことを学ぶことになるのだろう。正確には、学ぶのではなく、確認するということになるのだろうか。

大袈裟なタイトルでページ数も多いが、中を見てみると、わかりやすそうな内容だったし、ところどころに図や写真も入っている。値段もポリウムに比べると手頃だった。

買ってみようか。久し振りにそう思った。明日か明後日、図書館に寄贈するまで、私も形而上学観点に立ち、現代日本の社会が直面する課題とやらを考察してみよう。

そして、形而上学を小脇に抱えたまましばらく店内を散歩して回った。

*

壁の時計を見ると、午後八時ちょうどだった。

彼がカウンターにやってきた。

「お買い求めいただけるんですか？」

私は申し訳なさそうな表情を浮かべたと思う。

買ってくださったのなら、なんて口にするべきじゃなかった。あの時は軽いユーモアが口をついてでたと思ったけど、受け止め方は人それぞれだ。

「形而上学的に考えたら、買うべき本だという結論に達したもので」

彼は穏やかな視線を私に向けた。獲物を狙う肉食獣の目付きではなかった。もちろん狙われる側でもない。

私の心配は幸運にも無用のことだった。彼の瞳が私のえくぼに向けられているのがわかった。

「よい出会いになりますように」

「期待して読むよ」

彼は釣り銭とレシートを受け取ると、胸ポケットから名刺を取り出した。

浦賀秋雄 図書館司書

彼は自分が読みたい本を探しに来ているわけではなく、図書館の仕事、つまり選書の参考をするために来ているのだといった。

「やっぱり」

私はちょっとした賭け事に勝ったかのように、えくぼつきの笑みを浮かべながら三度ほど頷いた。

「そうだと思っていました。でなければ同業者かなと」

「どうしてわかったのかな？」

彼の問いに私は唇の端を少し歪めて言葉を探した。

「匂い、気配、身のこなし。そんなところです。じろじろ見ていたわけじゃありませんけど。本の匂い。本と日常的に接している人の気配。本を抱えて移動する身のこなし。やっぱり当たっていましたね。それと、さっきも書棚の本の整理をされていました。

とても手早く、丁寧に。気づいていましたよ。そういうことがあるかもしれないと、今日はわざとゆっくり目に歩いてみたんです。ごめんなさい」

「そうだったんだ」

「そんなことするお客様は初めてです。さっき、お客様がお見えになった時、まだ経験の浅いアルバイトの女の子に、あのお客様から目を離さないで、といったんです。すると彼女、持ち逃げの可能性があると勘違いしちゃって。お客様に書棚を整えさせるようではいけない、ということを教えたかったですけどね」

私たちは静かに笑い合った。もう少し彼と話をしたいと思っ

*

お茶に誘ったのは片桐さんのほうからだった。

「今日は早出ですから、もう終わります。あと十分くらいで片付けますから隣のお店でよろしければ」

先にカフェに入った私は、また書店側の席についた。ウェイトレスに、もうひとり来るから注文はあとでといい、ガラス越しに書店の中をぼんやりと眺めた。

大学を出てすぐに司書資格の枠で市役所に採用された。以来、図書館以外の職場経験がないまま年を重ねてきた。

図書館と書店は、本を扱うという共通点はあるが、本を貸し出すということと販売するということは、まったく別の意味である。書店は経済的な要素を抜きにしては成立しない。

―図書館で本を借りるくらいなら買うよ。

十数年ほど前になるが、異動してきた管理職がいった。だから自分に図書館は必要ないという意味だ。この類の職員は少なからずいる。

私は笑みを浮かべながら返した。

―ご自分の財力で賄える程度の読書量で良かったですね。もちろん、それが最後の会話になった。

「お待たせしました」

そんなことを思い出していると、片桐さんが来た。

片桐さんは白色のダウンジャケットを脱ぎ、濃紺の布製のエコ

バッグと一緒に椅子の背に掛けた。店で身につけている白いブラウスはユニフォームだったのか、タートルネックのセーターだった。色は髪を束ねるリボンと同じブルー。

私はカプチーノを、片桐さんはダーズリンを頼んだ。

お互いが注文した飲み物が届くまで、そして届いてからも、書店や図書館のとりとめのない話をした。

とても心地のよい時間だった。片桐さんは、自分の仕事の話をしている時も、私が退屈していないかどうか、気を配っていたし、私が図書館のことを話している間も、とても熱心に耳を傾けてくれた。

会話が途切れた時、片桐さんはエコバッグから輪ゴムで束ねた手書きのポップカードを出して見せてくれた。トランプなら二セツトほどの厚みがある。

片桐さんは輪ゴムをはずしながら、この店で働く面接と思っていたら、ポップカードを書かされたことを話してくれた。

そのエピソードはなにかで読んだことがある。採用試験は社長の仕事で、必ずポップカードを書かせるということだった。

名刺をひとまわり大きくしたくらいのサイズの白いカードに、黒い文字で短いコメントが付されていた。

「もし、お気に召したものがあればどうぞ。いくつでも」

「もう使わないの？」

「一冊につき一枚と決めているんです。一冊売れたらそれでおし

まい。ノルマがあるわけじゃなく、プライドみたいなものです」
「もったいないね」

「私だけのルールです。売れ行きがよくて在庫がなくなつて、次に入荷したら、同じ本をお勧めするのにも新しいカードをつくりません。もちろん別の言葉で。お客様と本の出会いは一期一会ですから」

微笑みながら話す彼女を見てると私も自然と微笑んでいた。

「ロッカーにはこの他にも山ほどあります」

「山ほど。ということとは？」

「はい。そういうことです」

優秀な店員だ。さぞかし売り上げに貢献していることだろう。

私はランプをゆっくりとさばくようにカードをめくっていった。表には短い言葉、裏には書名が記されている。

「これだけで本になりそうだね」というと、片桐さんは「思ひつきもしませんでした」と笑った。

—100万通りの読み方がある。

そう書かれたカードで手がとまった。

カードの裏には『100万回生きたねこ』と書名が記されていた。

大学二年の秋、交通事故で死んだ父の書棚を整理している時、その絵本があったことを思い出した。父は歴史小説を好んで読んでいたので、絵本が一冊だけ書棚に並んでいたことに違和感を覚

えた。その絵本は小学校の図書室で初めて読んだ。生と死を繰り返すねこの話だ。物語の奥深さにぼんやりとした感動を受けたように記憶している。書棚を整理する手をとめて、絵本のページをめくった。父はこれを読んで、どんなことを思い、感じたのだろう。機会があれば私に勧めるつもりだったのかもしれない。久しぶりに再読することになったが、ぼんやりとした感動は子どもの頃と同じだ。読後感を別の言葉に置き換えることもできるが、そうしてしまうと感動が薄れてしまいそうな気がした。まだ父が生きているうちに再読しておけば、感想を交わすこともできたのだが、もう叶わないことだ。

私は父を亡くしてからしばらくの間、精神的なバランスを断続的に崩していた。交通事故で父を亡くすということの理不尽さに耐えきれなかったのだろう。

「夏休みには帰ってくるんだろ？」

電話で交わした最後の言葉だ。翌日に父は死んだ。

そういうことは起こりうる。

今なら理解できる。朝、笑いながら言葉を交わした人が、その日の夜には息を引き取ってしまう。そういったことは一般論として、間違いなく起こりうることなのだ。しかし当時の私は、それを理解することができなかった。そして、精神的なバランスが崩れると、意識と言葉がうまく噛み合わなくなった。

精神的なバランスを崩した私は小説を読み耽った。物語の世界に身を委ねることで、意識と言葉が安定していった。バランスを整えるには、いったん別の世界に入り込み、呼吸をするようにその世界の言葉を自分自身の中に取り込むことが効果的だった。大学生のうちには、何度かそんなふうに精神的なバランスが崩れることがあり、その度にいくつも小説を読み、バランスを整えた。

片桐さんはそのカードがきっかけで就職することができたと教えてくれた。二人に共通する本のカードを選んだことで、深い繋がりを見つけたような気がした。

私はその絵本に絡めて、父の身に降りかかった出来事をきっかけにして精神的にバランスを崩してしまい、小説をたくさん読んだ時期があることを話した。

私が話を終えると、今度は片桐さんが自分の辿ってきた道を話してくれた。

*

「懐かしい。それはここで働くことが決まった時に書かされたものです。実家の本棚にもありました」

すると浦賀さんは、「よくできている」といってくれた。そして、その本のこと、お父さんのこと、自分を取り戻す言葉を探し

ていた頃のことを話してくれた。

この一冊の本で浦賀さんと深く繋がった気がした。そして、ここで働くまでのことを思いつく限りの言葉にした。浦賀さんは柔らかな相槌を打ちながら聞いてくれた。

私は現実から連れ出してもらうために小説を読み、浦賀さんは自分を取り戻すために小説を読んだ。私もいつかそういう読み方をするようになるのだろうか。自分自身が逃げてばかりいる矮小な人間に思えた。

この仕事もそろそろ潮時かもしれない。

辞めたところで、ほかにあてがあるわけでもない。けれど、目的があってここに来る浦賀さんのような生き方が必要だ。

私には目的といえるものがなにもひとつない。実家から逃げるように出てきて、ただ戻りたくないだけだ。食堂に立っていた頃のことを思い出すと、いまだに煙草と酒の匂いと客たちの猥雑な言葉がよみがえる。身体を触られた時のひどい嫌悪感も。そして生きるために客に媚を売る両親の姿も。

逃げ出すことだけが目的だった。前の会社では起業した何人もの人たちと出会い、起業を志す何人もの人たちのために本をつかった。皆が目的を持って生きていた。私を現実から連れ出してくれた小説たち。そこに出てくる人物たちもそうだ。

もしも私のこの人生が小説だったとしたら。誰が手に取って

れるだろうか？面白い小説だろうか？誰かを救うことができる小説だろうか？

違う。

私はなにも読むところのない、つまらない小説のような人生を送ってきた。

もう一度あの現実に戻ってみるのも悪くない。両親は生きるために店に立ち、私は生きるために店を出た。

実家の本棚にあった『100万回生きたねこ』は、もしかしたら両親が読んでいたのかもしれない。

—もしも生まれかわったら。

両親はそんな思いでページをめくっていたのだろうか。

実家の食堂を思い出すと、今でも嫌悪感は拭えないが、今の私はあの頃の私ではないはずだ。私を現実から連れ出してくれた小説たちのように、今度は私自身の物語をあの場合で紡いでみよう。逃げ出した場所で。今ならあそこに私の存在価値を見出すことができるかもしれない。少なくとも、なにかしら読むべきところのある小説のような人生になると思う。

*

急ぎの仕事が重なり、書店に足を運んだのは二週間後だった。

片桐さんの姿が見えたら、気になった私はレジカウンターにい

た店員に尋ねた。すると一週間ほど前に仕事を辞めたという。店員は辞めた理由も、どこへ行ったのかも知らなかった。

次の日、『100万回生きたねこ』を図書館で借りた。百回以上の貸出があり、そろそろ買い替え時だ。

—100万通りの読み方がある。

そのとおりだ。この一文だけでいい。

もしもどこかで片桐さんと再会することがあれば。そのような奇跡が起きる確率は極めて低いことは経験から知っている。だが、想像することは自由だ。

もしも片桐さんと再会したら、近くの図書館へ誘おう。

私たちの生きている世界は混沌としている。その混沌は喜びや悲しみ、絶望、喪失などといったあらゆる感情で成り立っている。だからこそ生きる意味を見出しにくくなるのかもしれない。図書館には様々な知が体系的に存在している。混沌とした世界にいる片桐さんにとって、そして私にとっても、必要な言葉は必ず図書館に存在しているはずだ。

『100万回生きたねこ』を置いていない図書館などないだろう。二人で読んでみよう。片桐さんが書いたように100万通りの読み方がある。その時の片桐さんが、そして私が抱く感想を語り合ってみよう。

目的の書棚に向かい、今度は私が片桐さんの前を歩こう。片桐

さんはポニーテイルを揺らしながら私のあとを続くだろう。

*

この小説はここで終わる。

片桐さんと浦賀は僕であり、僕ではない誰かだ。

小説に出てくる片桐さん以外の店員、図書館の同僚、もちろんカフェのウェイトレスや客にも名前があり、それぞれの人生がある。そして、それぞれの人生の過程に思いを馳せれば、数え切れないほどの人が浮かんでくる。

そうした人々のすべてをひとつの小説で書き尽くすことは、誰も試みていないはずだし、おそらく不可能だ。

僕は時々そんなことをぼんやりと考える。もちろん、その度に僕はひどく絶望する。だから、ある部分ができるだけ丁寧に切り抜き、光をあてようとする。その光は力に満ち溢れた真夏の太陽であり、静かな夜に浮かぶ満月の明かりであったりもする。

いずれにしても、どんな言葉にも真実はひとつしかないはずだと信じて言葉を探し、文章を紡ぎ続ける。その向こう側にあることを誰かに伝えるために。



死よりよみがえりし人

ルカ町田宗賀ジヨアンの生涯

富山・小矢部市職（退職者）

浅香 恵

陸奥の国にありて

死よりよみがえりし人の墓あり

その墓は白き十字の花々で

守らるる

と、宗賀の決心はかたかった。

「町田どのは、この長崎が深江浦ふかえのうらと呼ばれていた頃からの名門である。その町田どのが転宗してくれば…。聖ルカの再来とまで言われている町田宗賀どのであるから…」

宗賀は白髪はくぱの頭を横に振った。

「転宗しなければ、家や財産を没収のうえに長崎追放となるのですぞ」

「高木作右衛門どのは、ルイスの洗礼名を持ち、ミゼリコルディア組（長崎慈悲組）の世話人もつとめておいでるのに、転宗されるとは、みそこなったわ」

寛永三年（一六二六年）のことであった。長崎にある町田宗賀まちだそうかの屋敷では、主人の町田宗賀と客の二人、高木作右衛門たかぎさくえもんと末次平蔵すえつくへいぞうが言いあらそっていた。

「町田どの、これほど言っても転宗してくれないのか」

「なんと言われても同じことじゃ、わしは天主教を守りぬくぞ」

「末次平蔵どのも転宗されました。転宗は江戸幕府からの強い指示ですぞ」

末次平蔵も言った。

「このたびのキリシタン禁令は、今までの禁令とちがって、きびしいのです」

宗賀はスクツと立ち上がると、そのまま部屋を出ていった。そして帰らなかった。

「なんと、長い便所であろうか」

「便所ではない、宗賀はにげたのだ」

「にげた？着の身着のままか」

当時、長崎に住む三万もの人々がすべて天主教（キリスト教）を信じていた。

宗賀もジョアンという洗礼名をもらっていた。それが、なぜ、ルカと呼ばれるようになったのかは…。

宗賀はミゼリコルディア組（長崎慈悲組）の世話人をしていた。未亡人や孤児等の貧しい者のために、お金をあつめて「ミゼリコルディアの家」を建て、ライ病人のために病院を建設して治療した。

ライ病にきく薬はない。だが、清潔なふとんと、栄養のある食事は、病人を力づけた。

ミゼリコルディア組の始めとなったのは、堺出身の洗礼名ジュ

スチーノと洗礼名ジュリアの夫婦が慈善院を建てたことにあった。

宗賀の若い時に、ジュスチーノは死んでいたが、ジュリアは見たことがあった。病人の看護のために髪を短く切りそろえた横顔は童女のように愛らしかったのをおぼえている。ジュスチーノとジュリアの死後、残された財産で運営されていたのを、宗賀たち、長崎の町年寄が受けついたのである。

ライ病人が死ぬと役所に届け出なければならぬ。伝染をおそれて火葬するのである。

役人が足でライ病人をけりながら戸板にのせるのを、宗賀はとめた。

「なにをするか。死者は、なによりも、とおといものじゃ」

宗賀は、手ずから死人の衣服を新しいものに着がえさせて、戸板にのせてやった。

その姿は神々しく、まわりの人々は聖人ルカの再来だと言いつつ。聖人ルカは医師でもあったので、町田宗賀にふさわしい呼び名だった。

「ルカさま」

町田宗賀ジョアンは、尊敬をこめて、長崎の民からそう呼ばれていた。

「たとえ全世界を自分の領地にできたとしても、己の魂を失った

としたら、何の意味もない」

宗賀は福音書の二節をつぶやきながら、裏山の立山にむかった。着の身着のままであった。

「ルカさま、どこへいかれます」

「ルカさま、いかがなされました」

通りすがりの者たちが問いかけ、ついてきた。やがて、それは大きな集団になった。

「宗賀は裏山に、にげました」

末次平蔵の部下が告げた。

「町のみんが、のこぎりやかなづちで宗賀をおどしているのだな」

「おお、その、のこぎりやかなづちで宗賀をおどしているのだな」

「いえ、宗賀のために、小屋をたてています。なかには、水や食料を運んでいくものさえ」

「なんとということだ。ええい、才介さいすけを呼べ」

「才介とは、あの才介のことでございますか？」

「あの才介のほかに、どの才介がいるというのじゃ。才介をよべ」

裏山の立山で、宗賀は信者たちにかこまれて、祈りの言葉をとなえていた。

そのそばでは、小屋がたてられつつあった。

「才介が来たっ」

「才介が来たっ」

恐怖にみちた声があがった。

内町火消組の頭であり『平戸町のお頭かじり』と呼ばれている平尾才介すけは、六尺（約百八十二センチ）の大男である。

その才介の後ろに従うのは弟の莊次郎さぶぢろう。莊次郎も才介とかわらぬ大男で、二人ともタイ捨流の剣術の名手である。

宗賀と才介は、立ったまま、にらみあった。

空中で火花が散るような、にらみあいであった。

才介が膝をついた。莊次郎もみならった。

「大おじ上、われらより先に死なないとの約束でしたね」

才介、莊次郎にとって、宗賀は大おじ（父のおじ）にあたる。

「いったい、いつの頃のことをいうておる。それは、そなたたちが、まだ幼い頃のことではないか」

宗賀と亡き妻のあいだには子どもがなく、宗賀の甥夫婦おにいを夫婦養子としてむかえたのは二十八年前だった。

才介が産まれ、町田家に赤子の才介を中心に笑い声に満ちた日々が続いた。

だが、莊次郎を産むと、甥の妻がその産後の肥立ちが悪く亡くなってしまった。

莊次郎が三歳の時、病弱だった甥も死の床についてしまったのだ。

「おじ上、すみませぬ。息子たちをたのみます」

苦しい息の下から、幾度となく宗賀に頼んで、甥は死んだ。

あいつく甥夫婦の死に、「町田さまには死神がついているような」と、うわさが長崎の町に流れた。

宗賀自身も、つかれて床についてしまった。宗賀は、この時五十歳である。本来なら業隠居の年なのに、幼子二人と、とり残されてしまったのだ。

宗賀がねていると、額ぬかの手ぬぐいをとりかえてくれる小さな手がみえた。

「おおおじいじ、おおおじいじ」

五歳の才介だった。となりには三歳になったばかりの莊次郎がすわっている。

「気がついたか、おおおじいじ」

才介も、莊次郎も心配していた。幼心にも心細かったのだろう。

町田家には財産があり、信頼できる奉公人もいる。だが、宗賀が亡くなれば、幼子だけでは、どうなるかわからないのだ。

「おお、死なぬぞ！大おじは、そなたたちより先には死なないぞ」

才介と莊次郎を両手で抱きかかえて宗賀は叫んだ。自分自身を励ますように。

「甥は書物ばかり読んで、身体をきたえることはしなかった。才

介と莊次郎は、そうなってはならない」

宗賀は、タイ捨流の剣道場に二人を通わせた。素質があったのか、才介も莊次郎もメキメキと腕を上げた。

やがて：

「町田さまの死神は、あの悪童が追い払ってしまった」と、うわさされるほどになった。「町田さまのお家のお子なればこそ、がまんしているのですぞ」との苦情に、宗賀は、ひたすら頭を下げた。

けんかはする、他人の屋敷は横ぎっていく、植木鉢はこわしていくという具合であった。

宗賀は二人をセミナーオ（小神学校）に入れた。当時、良家の子息はセミナーオで合宿していた。

だが、ある日、宗賀が帰宅すると、才介と莊次郎がいて、剣をといでいた。

「おまえたちは、どうしたのだ？セミナーオを脱出してきたのか？」

「脱出してきたものではありません。追放されたのです」

「追放……で、なぜ剣をといでいる？」

「今から、しかえしにいくのです」

「…ばかなっ」

宗賀は二人を座敷牢に入れ、説教して、あやまるまで出さなかった。

「町田家の悪童」と呼ばれるゆえんだった。

町田宗賀は、莫大な銀錢を教会に寄付し、ローマ法王に自分の名前で親書を送るほどの熱心なキリシタンだった。

慶長十九年（一六一四年）二月に、バテレン追放令が出されると、宗賀は、才介と莊次郎を親戚の平尾家に養子に出した。少しでも災いが二人に及ばないようにとの、宗賀の気持ちであった。宗賀は、それほどまでに、二人を愛していたのである。

平戸町の屋敷に移った才介と莊次郎は、仲間を集めて遊び暮らし、長崎の町を肩で風をきって歩いた。なにしろ、金はある、身体は大きい、頭がいい、人が集まるはずであった。

才介の存在に困った長崎代官と四名の内町年寄（一人は宗賀）は、才介を内町火消組の頭に任命した。

今でいうなら暴走族のリーダーを、消防長にするようなものである。

これが、意外な効果を發揮した。

火事ともなれば、才介、莊次郎をはじめとする命しらずの若者は、火のなかに飛びこんで人々を救出した。

才介は若者たちに人気があり、今や才介ひきいる内町火消組は二百人をこえる。

「いうことをきかないと才介のところに行るよ」と、子どものおどし文句に使われる才介であったが、長崎の民からは、不思議な

人望があった。とくに中国大陸からの唐人や朝鮮半島からやってきた高麗人からは、人種差別をしない才介に信頼がよせられてきた。

才介と莊次郎につきそわれて、宗賀は山を降り、待ちかまえていた高木作右衛門と末次平蔵によって牢にいれられた。

長崎奉行所牢屋敷には、同じく町年寄であった後藤宗印がいた。転宗を拒んだのだった。

宗賀と宗印は、それから江戸に送られることとなった。

江戸に送られる宗賀と宗印を一目みようとは港は長崎の民であふれた。

宗印は、宗賀より二歳年上の八十歳である。

「ルカさまあ」「町田さま」「後藤さま」

長崎の民の声がアがる。

逃亡のおそれはないとして、宗賀も宗印もなわでしばられてはいなかったが、六尺棒を持った役人たちに囲まれていた。

「おまち下さいっ」

ひめいのようなするどい声で、女が一人走ってきた。

「才介の女房でございます」

と、言うとき、宗賀のふところに、布袋を押しこんだ。

「すまない」と、宗賀は言った。

パシッと六尺棒で打ちすえる音がした。

「わいの女房に、なにをさらすんじゃない」

才介のどなり声がした。

長崎の民のすすり泣きにおくられて、宗賀と宗印は船に乗せられた。

布袋の中味は、コンフィットウ（コンペイトウ）であった。

「南蛮の砂糖菓子だ」

「おお、これは銀にもまさる」

「毎日、一粒ずつ、宗印どのといたただこう」

「ありがたい。才介どのの妻女は、気がきかれるのう」

「その妻女とは、三年前の婚礼の時に顔をあわせただけでのう」

「それは、また、なんとしたこと」

才介が平戸町の屋敷に女性をつれこんでいるといううわさを聞いて、宗賀が訪れたのは三年前だった。

「身分の低い女子を家にいれているというのは、ほんとうか？才介」

「身分が低いのではなく、身分というものが無いのでござる。

人買いにつれてこられて、ほかの女たちは泣いているのに、ツネだけは顔をあげて、毅然として歩いてきた。その姿にほれて、有金をはたいて買ってきてきたのです」

「そのようなものを妻にしなくとも」

「これは、したり。大おじ上の天主教のおしえが泣きますぞ」

才介はカラカラと笑った。

あわてて宗賀は、ツネを知り合いの家の養女とし、婚礼をあげさせたのだが、その後のつきあいはしなかった。

才介とツネとの間には、女の子が産まれていたが、宗賀は顔を見にいかなかった。

才介には名門の娘を嫁にと望んでいた宗賀だったので、ツネを嫁とは認めたくなかったのだった。

「すまない」と言ったのは、そのためだった。

コンフィットウは、甘く、舌の上で、とろけていった。

長崎代官屋敷は江戸城の北にあたる麴町（こうじまち）にあり、宗賀と宗印は、その牢にいれられた。

牢の入口が別々なのを見た宗賀は、コンフィットウの布袋を宗印のふところにいれた。

「かたじけない」

牢は、六帖ほどの板敷で、三方が壁であり、廁がついていた。

番人は四人で、昼夜四交代、縄はかけられなかった。

食事は日に二回だったが、不思議なことに良いものだった。入浴は許されなかったが、五日に一度、新しい下着があたえられた。

「宗印どの」

宗賀と宗印は、顔はみえないものの、板壁を背にして話し合うことができた。

祈りの言葉をとなえ、『どちらいなきりしたん』の一節を暗唱した。

「お誕生より、ご入滅のお作業を見たてまつれば、御謙おんけんりより他にあるべからず。あばら家やに生まれたまひ、馬槽うまぶねに置かれたもうことは何事を談じたもうぞ。ただ御謙おんけんりばかりなり……」

宗印の存在は、宗賀の光となった。

「きりえ、えれいそん（主よあわれみたまえ）くりすて、えれいそん（キリストよ、あわれみたまえ）

天にまします偉大なる吾らが父君、でうす（デウス）さま」

そうして、日々は流れていった。

「宗賀どの、草には力があるのだ」

「草に力が……それはなぜ」

「南蛮人が口にするものは肉ばかりだ。彼らは魚には興味をもたない」

「長い航海の間は干し肉と、小麦粉を水でねって焼いたビスコイトが主食だと聞いたが……」

「漂流して、助かったものは、不思議と野菜や海藻を好んで口にするものばかりだ。彼らは果物も好きで、ミカンなどは皮ごと食べる」

「野菜や海藻がのう」

「そう、通訳の言うことには、ジョセフじいさんは、草や海藻を

吐き出してしまったから死んでしまったそうだ。

ビスコイトを水で煮たててドロドロにし、その中に少量の草や海藻を刻んで入れた粥かゆを工夫して、食べさせようとしたのだそうだ。ジョセフじいさんは、粥をのどへ流しこむが、草や海藻は舌で吐き出してしまふ。わしは人間だ。山羊や馬ではないと言つてな」

「生死を分けるのは草や海藻か、宗印どの」

「そう、草には力があるのだ」

そうして、牢の生活も二年目になった冬の朝。

「宗印どの」

返事はなかった。

「宗印どのっ」

宗賀は叫んだ。

やがて、役人が、宗印の遺体を運んでいった。

「宗印どのが天国てんごくにいかれたのじゃ」

福音書の一節を宗賀はとなえた。

「天の父はすべてを許したもうなり。……天の下、すべてのことに季節がある。すべての業には時がある。生まるるに時があり、死ぬるに時がある。植うるに時があり、抜くにも時がある。神のなさることは、みなその時になつて美しい……」

会話する相手がなくなった宗賀は、一日中、祈りの言葉を口にしてすごした。

一日は一月のように、一月は一年のようにすぎて、宗印の死から三年後。

「町田宗賀、出ませいっ」

宗賀は牢を出され、辻かごに乗せられた。

(いったい、どこへいくのだろう)

空気が冷たくなっていくので、北にむかっていくことはわかった。

かごの旅は三日間続いた。ねむるのもかごのなかであったので、宗賀はつかれはてて気を失った。

目をさました時、宗賀は、小ぎれいな部屋にねかせられていた。

「ここは…?」

「お氣がつかれましたか」

枕もとにいたのは、見たことのない若い男だった。

「ルカさま、わたしは針売りの三郎ともうすものです。才介さま、

莊次郎さまの命令を受けて、ルカさまをこの里に、つれてまいりました」

「才介、莊次郎…」

あの二人が、大おじである宗賀を見ずるはずがなかった。

「そうしたら、食事が良かったのも、新しい下着があたえられたのも…」

「みな、才介さまと莊次郎さまのお手配です」

「そうであったか、ありがたいことだ。だが、どうして、わたしはここにいるのだ」

「ルカさま、ルカさまは、この寛永八年十二月十八日に、二本松で火あぶりの刑になられたのです」

「わしが火あぶりの刑に…?」

「身がわりになったのは病死した老人ですが、あの老人は、たとえ生きていても有名なルカさまの身がわりに喜んでなつたことと思いません」

「火あぶりとは…いったい、なんとしたことだ」

「もはや、キリシタンは迫害を通りこして、弾圧となっております」

家や財産を没収されるのは覚悟の上だったが、火あぶりの刑とまでは、宗賀は思っていないかった。

「キリシタン禁令は、それほどまでに、はげしくなつてきていたのか…」

「無念でございます」

針売りの三郎は頭を下げた。

「ルカさま、火あぶりの刑にあったルカさまが、死よりよみがえられたとなれば、それはキリシタンにとって、またとない心の支えになりましょう」

宗賀は手足のふるえをおさえることができなかった。

「ここは、キリシタンとは関係のない山里です。庄屋には、ルカ

さまが死ぬまでこまることのない銀を渡してあります。これも、才介さま、莊次郎さまのこころづくしです。

ルカさま、この山里で生きていて下さい。ルカさまのお命は、キリシタン信者のささえになっているのです」

目にみえない細いくさりで守られていることが宗賀にはわかった。

「才介、莊次郎、そなたたちのおかげだったのか」

幼い頃の二人の姿を思い浮かべて、宗賀は泣いた。

次に目をさました時、三郎の姿はどこにもなかった。

ふすまが静かに開いて、若い夫婦がはいってきた。

「庄屋の清太郎でございます。これなるは、妻の昌まさです。あと二人の幼い息子がおりますが、後ほど、ごあいさつを」

清太郎がさしだしたのは、木のおわんにはいった湯だった。

「かようなものしかございませんが：」

きのこと汁そうじと雑炊ぞうすいと香のものだった。

「あたたかいものが、なによりのごちそうでございます」

宗賀がそう言うと、昌がほほえんだ。

庄屋というには、清太郎の衣服は幾度も洗いはりしたようなもので、すりきれており、昌の着物もつぎあてがしてあった。

(貧しい山里なのだ…)と、宗賀は思った。

「よろしければ、村のなかを案内いたします」

清太郎に手をとられて、宗賀は外に出た。

新しいワラジが用意されてあった。

(おお、土のうえじゃ。草の香りじゃ。宗印どの…)

風がそよぐ。

木々のざわめきがきこえる。

一陣の風が、野をゆるがせていく。

風はつぎからつぎにふき、また、どこかに消えていく。

(宗印どのに、この景色をみせてあげたかった…)

「この村は、祖父の代まで騎馬衆きばしゅうの村でした」

清太郎は語りかけた。

「私の父は、私が母のお腹にいる時に関ヶ原の戦いで戦死し、祖父に育てられました。」

戦乱の世が終わると、騎馬衆は解散させられ、馬はとりあげられ、ただ年貢米をつくるのみの民となりはてました」

「騎馬衆の村とな？」

宗賀は聞いたことがあった。半分は農民として、半分は戦士として生きる民がいると。

「祖父の代までは、お茶というものを飲み、村の子どもたちは菓子なるものを食べたりにしていたようですが、今では、きずぐちを酢すで洗うことすらぜいたくなこととなりました」

清太郎の目のふちが赤くなった。

「いえ、といっても、お客人のルカさまに不自由はさせません。」

どうか、氣を楽になさって、いつまでも、この山里にいて下さい」
(清太郎どのは、その名のとおり、気持ちの清々しい若者であるらしいのう)

ある日の事だった。

「ルカさまは、四角い字を読まれますか？」

「四角い字とな？」

清太郎が差し出したのは漢書の論語だった。

「おお、これは論語ではないか。これは人として学ばなければならぬことが多く書いてあるのじゃ」

「祖父の代までは、十三歳になると講こうというものがあり、集まって習っていたようですが今はそれもなくなってしまい、読み方がわからないのです」

「そのようなことなら、わしが声に出して読んでみせよう。村の衆を集めるがよい」

「ありがとうございます、ルカさま」

「これは、こうすると読みやすいのじゃ」

宗賀は、朱筆で、返り点や送り仮名をいれていった。

朱筆一本で四角い文字だらけの漢籍をすべて和語に変えていく宗賀を、清太郎は尊敬のまなざしでみつめていた。

清太郎は、仮名かなの読み書きはできて、訓読点や送り仮名の無い漢籍を読めなかったのである。

こうして、論語の素読そどくが始められた。

夕食を終えた村の衆が、宗賀の部屋に集まってくる。

「昼間の農作業でつかれておるであろうに、足をくずして楽にさせよ」

清太郎の二人の息子も参加した。

「ルカさま、よろしく願ひします」

下の息子はまだ三歳である。下げた頭を上げようとして横にころがりそうになるのを、兄の手がささえるというあどけなさである。

(なんと可愛いこと…)

『もと本立ちて道みち生なず』『先まず行ゆう』とか『倦うむことなかれ』とか、意味のわからない言葉もあるが、まず声に出して耳で聞くということが大切なのじゃ」

「はい、ルカさま」

論語の素読は続けられた。

つつましいながらも誠実に世話をしてくれる清太郎夫婦と二人の息子たち…。

宗賀は、不思議な錯覚に落ちた。

まるで甥夫婦が生きていて、才介と莊次郎が小さくなってもどってきてくれたような…。それは幸せな錯覚だった。

宗賀自身が、この山里にずっといたような気持ちになっただけだった。

「ルカさま、寒くはありませんか？」

「いいや、ちょうど良い気分じゃ」

清太郎との散歩が、宗賀の日課になった。二人の姿は、実の祖父と孫のようだった。

「おお、ドクダミの花が咲いている」

「かわいい花ですね」

ドクダミの花びらと見えるのは「苞ほう」と言い、棒のように突き出した小さな黄色の多くの花がついているのだが、宗賀たちの時代の人々は、そのことを知らなかった。

ドクダミの白い十字の花びらは、宗賀に十字架を、天主教のおしえを思い出させた。

（天主教を広めたい。でも、それは、許されないことなのだ。）

再びあたえられた生命だ。ムダには使ってはならない

宗賀は、あることを調べ始めた。

（宗印どのは、草に効用ありと考えておられた。草には、力があ
るのだ）

そんな、ある夜のこと…。

パチパチと火のはぜる音がする。

宗賀が目ざめると、足元は火の海だった。

「大おじ上」

「才介ではないか？ どうしたのだ。それに、その身なりは…」

長崎にいるはずの才介が火事装束しょうぞくで、うずくまっている。

「大おじ上、われらより先に死なないとの約束でございました
ね」

「いったい、いつのことを言っているのだ、才介」

その自分の声で、宗賀は目ざめた。

（生々しい夢だった。才介の身に、なにかおこったのか…？）

悲報が伝えられたのは、一か月後だった。

長崎より使者が訪れたのだった。

「もうしあげます。才介さま、火事にて亡くなられました。弟の
莊次郎さまが才介さまの形見の陣羽織を着て、長崎の町を巡回さ
れますと、その後ろ姿に『町田さま』と声がかかるそうです。

長崎の民は、才介さまを『長崎の守護神』と讃えております」

そう伝えると、使者は深く頭を下げて立ち去った。

「才介！」

（生きて会えるとは思わなかったが、それにしても…！才介！）

「熱かったろう、苦しかったろう、才介！まるで、わしの身がわ
りに火あぶりにあったようなものじゃ！」

宗賀は、乱暴ではあるが、男らしい才介を他のだれよりも愛し

ていたのである。

才介の死を知ってから、宗賀はがっくりと年を取ったような気が

がして、床につく日が多くなかった。

「頼みがあるのじゃ、清太郎どの」

「はい、なんなりと申しつけ下さい。ルカさま」

「これは、わしなりに村の衆に聞き取りして書きためた書物だ。

薬草の効果が書いてある。

ヤマザクラの樹皮をはいで乾燥させたものは生薬としてセキ止めになるし、ナンテンの実も効果がある。

なかでも一番良いのはドクダミじゃ」

「ドクダミ？」

「葉を乾燥させて茶として飲んでもよいし、十葉といわれるように、様々な効果がある。これらを書いたものを広め、伝えてくれぬか」

「…かしこまりました、ルカさま」

こうして、ドクダミたちの効果を書いたものは「るうかそうしよ」として、手から手へと書き写されていった。

「ルカさま…」

宗賀を山里に導いた針売りの三郎は、るうかそうしよを見て泣いた。

「まことにりになかった ありがたきもの

できものが うんだときは すのかわりに」

るうかそうしよにおりこまれているのは、まりあ、でうす、その他の祈りの言葉だった。

「清太郎どの、今年はず、くもった日ばかりなのであろうか、

このような日が続けば、稲の実りが心配されるのう」

「…はい、ルカさま」

清太郎の妻昌は、青く澄みわたった空をながめて涙した。

宗賀は、白そこひ（白内障）に、かかっていたのだ。

清太郎と昌の手厚い看護を受けて、宗賀はねむるように息をひきとった。

宗賀の遺体は、村の衆の手で、裏山のドクダミの咲く丘に葬られた。

清太郎は右手を自分の額にかざした。それは騎馬衆の頭領の合図のしるしだった。

「陸奥の国にありて 死よりよみがえりし人の墓あり その墓は白き十字の花々で 守らるる」

集まった村の衆は、それを三回復唱し、別れた。

「これで良い、伝令は長崎のルカさまの御身内に届くであろう」
清太郎は、この伝令が三百年も続いて残り、明治時代に「青森県にイエス・キリストの墓がある」との騒動をひきおこすとは、夢にも思わなかった。

清太郎は、宗賀の墓にひざまづいて、ささやいた。

「ルカさま、清太郎も、いづれ、おそばに埋めてもらいます」
宗賀とともにすごした日々は、清太郎にとって宗賀は祖父に、

まさるともおとらぬ存在になったのだった。

「るうかそうしょ」は、書き写され、あるいは、口づたえに伝えられていった。

虫にさされたところに、ドクダミの葉のしるをしぼって「るうかさま、るうかさま、るうかさま」と三度となえる、おまじない（民間伝承）は、葉が一般人の手に入る大正時代まで、一部の地域に続いていくのである。

ルカ町田宗賀ジョアン

死よりよみがえりし人

〈了〉

※ 本作品には今日の人権意識に照らして不適切と思われる語句がありますが、作品執筆時の時代背景などを考慮しそのままとしました。作品自体には差別などを助長する意図がないことをご理解いただきますようお願い申し上げます。

奨励賞



ノンフィクション



コロナパンデミックと社会的影響

—都営神保町駅を事例として—

東京都本部・東京交通労組市ヶ谷支部

飯野 裕史

はじめに

物事の動きを止めることなく本当の姿を把握することは難しい。新型コロナウイルスのパンデミック（大規模感染）もそのひとつだ。2020年1月16日、中国の湖北省武漢市に滞在し、日本に帰国した神奈川県在住の30代の男性から新型コロナウイルスが検出されると厚生労働省が発表してから間もなく、その感染拡大は日本中を恐怖に貶めた。国内で確認された新型コロナウイルスの感染者は、4月18日時点で累計1万人を超えた。1日の新規

感染が5000人を上回る日が増えており、感染者が倍増するいわゆるオーバーシュートを我々は食い止められずにいる。対象地域が限定的であった緊急事態宣言が4月16日に全国拡大されたからは、繁華街や観光地は驚くほど閑散とした姿を見せている。我々の職場環境や休日の過ごし方も激変してしまった。新型コロナウイルスの蔓延とそれが及ぼす社会、経済、日常生活への影響は、今後とも不透明のままである。いまだ本当の姿を把握できない今次のコロナ禍は、我々の身の周りの環境を想像以上のスピードで変えている。

見えない敵 新型コロナウイルス

2019年12月、ルノー・日産・三菱アライアンスの元CEOのカルロス・ゴーン被告が保釈中にレバノンへ逃亡したというニュースが国内の耳目を集めるその裏では、世界を震撼させることとなる脅威が蠢きはじめていた。12月30日、中国保健機関は、武漢市で原因不明の肺炎が発生したことを第一報として伝えた。翌2020年1月7日には、肺炎の原因が新種のコロナウイルスであることが特定され、9日に中国国内で最初の死者が発生すると、瞬く間にタイ、韓国、台湾、そして日本でも感染者が次々に報告された。この新型コロナウイルスはその後も衰えを見せることなく、米国、シンガポール、ベトナム、ネパール、フランス、マカオ、オーストラリアなど全世界に拡散していった。

コロナウイルスとは、ニドウイルス目のコロナウイルス科に属する。電子顕微鏡で見ると、ウイルス表面にある突起が日食の太陽コロナのように見えることからこの名が付けられた。SARS（重症急性呼吸器症候群、2003年）やMERS（中東呼吸器症候群、2012年）ほど強い毒性はないが、3日から12日（平均7日）の潜伏期を経た後に発熱や咳嗽などの呼吸器症状が発症する。本論執筆現在、有効なワクチンや抗ウイルス薬はなく、感染者の発症率や重症化率、合併頻度や妊婦、胎児への影響なども未知数である。また、感染者の6割が男性という傾向があり、糖

尿病や高血圧などの基礎疾患がある感染者に多く発症しているというデータもある。当初の発表では、ウイルス保有動物や感染者に濃厚接触した人だけが感染し、人から人への空気感染はないと報道されていたが、現在では感染者の飛沫に乗って空気感染することが主たる原因のひとつであることが分かっている。

この新型コロナウイルスは、必ずしも肺炎の症状を伴わないことがクラスター（感染者集団）を引き起こす大きな原因でもある。重症患者は氷山の一角に過ぎず、それ以外の大多数が軽症者、無症状者なのである。それゆえ、自分が本来隔離されるべきであることを自覚せずに日常生活を送ってしまっている感染者が多いのだ。新型コロナウイルスの猛威の淵源はここにあると言えるだろう。

「三密」避けて連鎖断ち切る

新型コロナウイルスによるパンデミックを抑える戦略のひとつにPCR（ポリメラーゼ連鎖反応）検査の徹底がある。症状のない人も含めて、感染の有無をいち早く察知し隔離を進めるというものだ。SARSやMERSで莫大な死者を出したシンガポールや韓国では、その経験からPCRによる大規模な検査体制を整えていた。しかし日本では、羽田や成田の国際空港で海外からの帰国者へのPCR検査が追いつかなかったように、その検査体制は十分に整備されてはおらず、直ちに強化することも困難であっ

た。

1人の感染者が何人に感染させるかを示す値に「基本再生産数」というものがある。これは、1人の人間が2人に感染させれば再生産数は2といったように考え方は簡単なのだが、この再生産数2というペースで感染が進行し、その後ねずみ講の要領で10回繰り返し返されてしまうと、感染者数は2000人以上にまで膨れ上がる計算となる。なんとも恐ろしい話だが、二次感染対策によってこの再生産数を1未満に抑えることが出来れば感染は抑制、事態は収束に向かうとのことである。米国やイタリアでは再生産数が2より3と算出されており、僅かな期間でオーバーシュートを引き起こした。

現在、感染症の研究者によって感染者の行動履歴のデータ化が進み、新型コロナウイルスの感染は「人」ではなく「環境」が大きく影響していることが分かってきた。飲食店やスポーツジム、そしてカラオケルームのような閉じられた空間が主要な感染に大きく関わっていたのである。そしてその閉鎖空間の中で、飛沫に乗ってウイルスが人から人へと感染していくというメカニズムも解明された。このような環境での二次感染は、屋外のような開かれた環境に比べ18・7倍起こりやすいとのことだ。つまり密閉、密集、密接のいわゆる「三密」と呼ばれる環境条件を避ければ再生産数は1を下回り、パンデミックは収束に向かうのである。我々は、勤務や私生活の中で起こりうるこの「三密」を回避すること

で感染の連鎖を断ち切らなければならない。

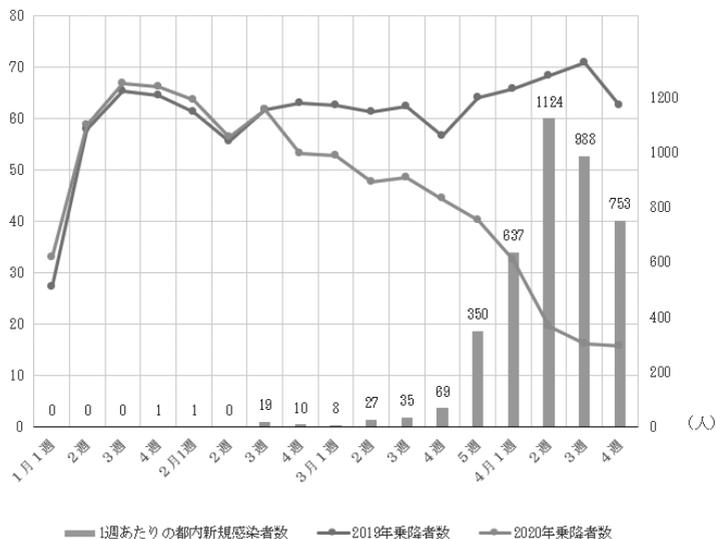
利用旅客は前年比20%台の週末

左のグラフは、2019年と2020年の都営地下鉄保保町駅の自動改札を利用した旅客の数を表したものである。調査期間は1月1日から4月30日までの4ヶ月間とし、グラフ下部には東京都内における1週間あたりの新型コロナウィルス新規感染者数を棒グラフとして付帯した。三田線と新宿線は改札を利用せずに乗り換えが可能のため、正確な乗降者が把握できないという問題はあるが、週単位での旅客数の推移を概観するには有用であろう。

グラフを見て分かるように1月の第1週から2月の第3週までは、昨年と今年で旅客乗降数は同じような推移を見せている。1月16日に国内初の新型コロナウィルスの感染者が発生し、2月3日には横浜港に停泊したイギリス船籍の豪華客船ダイアモンド・プリンセス号の乗員乗客がウィルスに集団感染していたというセンセーショナルなニュースも飛び込んできたが、神保町駅を利用する旅客数に変化は見られない。小池都知事の定例記者会見においても、日本経済新聞社の記者からの東京五輪延期に関する質問に対し、「中止も無観客もあり得ない」ことを強調する程度であった。この頃はまだ、都知事が新型コロナウィルスの感染拡大を喫緊の懸案事項としていなかったことが伺える。

都営神保町駅旅客乗降数と都内新規感染者数

(万人)



出典 都営神保町駅データベース（感染者は東京都HP）より筆者とCaolynが作成

旅客の乗降数に大きな変化が見え始めたのは2月の第4週からである。2月14日、都知事が「都内在住者に初めて新型コロナウイルスの感染症患者が確認された」と定例記者会見で発表し、不要不急の外出を控えることやテレワークなどを利用して自宅仕事をすることを正式に推奨した翌週にあたる。これ以降、神保町駅の利用旅客数は減少の一途を辿っている。3月25日の都知事による「感染爆発の重大局面」発言、そして3月29日、国民的なタレントであった志村けんさんが新型コロナウイルスによる肺炎で亡くなったというショッキングなニュースが報じられると、利用旅客数は急激な減少を始めた。それまで見えなかった死者の顔が初めて見えたとされるこの訃報は、都民が新型コロナウイルスの本当の恐ろしさを認識する最も重要な契機になったと言えるだろう。さらに、4月16日に発令された緊急事態宣言は、利用旅客数について正月週以下の水準にまで押し下げた。4月の第3週には前年比で22%にまで減少し、その数値は底打ちしている。

他方、都内における新型コロナウイルスの新規感染者数の推移は、3月の第3週までは比較的落ち着いた水準を維持していた。しかし第4週に入るとその感染者数は前週の2倍を記録し、第5週には突如として爆発的に増加している。東京都は、3月20日の春分の日から始まったこの週末を「都民の気が最も緩んだ3連休」と評価し、感染拡大の大きな要因としている。その後、4月の第2週の1124人の新規感染者をピークに、今日までその

数値は高値圏にとどまったままとっている。

これまで述べたように、神保町駅の利用旅客数は急激に減少していたが、実際にはこの3連休を利用して多くの都民が外出していた。クロスロケーションズ株式会社の調査では、桜の開花宣言に伴い、この3連休の都内花見スポット来訪者は同月第2週と比較して大幅に増加していたとしている。とりわけ上野公園や代々木公園では前週の1・5倍以上、新宿御苑や千鳥ヶ淵では2倍以上に膨れ上がり、目黒川沿いや井の頭公園に至っては昨年と同等か30%を上回る人々が花見を楽しんだと報告している。したがって都内各所で大勢の花見客を動員した3連休は、新型コロナウィルスの感染拡大を助長したと考えられる。

緊急事態宣言がもたらす経済活動への影響

現在、神保町駅の改札をはじめとした駅構内は深閑としている。例年、この時期に数多く目にする新学期を迎えた学生や足早の新人社員はその姿を見せず、ウィルス感染の懸念に直面した駅係員が静まり返った改札窓口で勤務を続けている。多くの飲食店が立ち並ぶ神保町界隈もその賑わいを潜め、通りを歩く人もまばらである。首都圏の経済活動が著しく停滞していることが一目瞭然である。

2020年2月、神保町駅の大規模改修に伴い、駅ナカに新規オープンした4つの店舗もその影響を激しく受けることとなっ

た。以下は、その4店舗のうち取材の要請に応じた「青山フラワーマーケット」と「PANNYA ASHIYA」の近況である。

キャンセル続いても駅ナカに期待

青山フラワーマーケット
シヨップマネージャー 中村萌恵さん

2月27日に神保町の駅ナカにオープンしたばかりの青山フラワーマーケットも、一連のコロナ禍で大きな打撃を被った店舗のひとつである。オープン当初は駅ナカとあって、ブーケのようなギフト品需要が堅調であった上に、帰途には敬遠される大型商品も想像を超える売れ行きを見せていた。また、男性のお客さまが主要な購買層になるであろうという予想に反し、オフィスや店舗に勤務する女性のお客さまが多数来店していたという。「お買い上げいただいてから1週間は元気な状態を楽しんでほしい」という思いから、シヨップマネージャーの中村萌恵さんは週に3回、新鮮で厳選された生花を仕入れて



中村萌恵さん 筆者撮影

いた。

しかし3月に入ると状況は一変。数多く入っていた事前注文の半分以上がキャンセルとなってしまった。神保町はオフィス街ということもあり、本来3月という送別会シーズンには花束の需要が大幅に見込める時期であった。しかし実績は当初の見込みの半分。青山フラワーマーケットにとってこの重要な時期を、新型コロナウイルスに奪われる形となってしまった。

仕入れから2日間が勝負となる生花は、1本200円〜350円、ブーケに仕立てても3000円程度と客単価は低めだ。出来るだけ多くのお客さまに喜んでもらうことで、なんとか成り立つ商売である。5月10日には、1年を通じて最大の繁忙期となる母の日を迎える。現在、日本で発令されている緊急事態宣言が延長されるようなことになれば、その損失は計り知れない。

それでも中村さんは明るい笑顔で語ってくれた。「5月は芍薬（シャクヤク）の花が最盛期を迎えます。産地、品種によって様々な顔を見せるこの花は、小さな蕾からは想像もできない大輪を咲かせて私たちを楽しませてくれます。厳選した多くの品種を用意してお客さまのご来店をお待ちしております。」

経営的に厳しい状況が続いているが、神保町の駅ナカというマーケットに大きな可能性を感じている。

（取材 2020年4月17日）

サービス重視でコロナと闘う

PANAYA ASHIYA

店長 杉本樹弥さん

高級食パンの売れ行きが顕著に伸びているという。たっぷりのバターやハチミツで仕上げ、ほんのり甘い食パンが人気だが、PANAYA ASHIYAの食パンは少量のバターと砂糖を基礎調味料とし、無添加で焼き上げている。PANAYA ASHIYAにとって駅ナカでの販売は初めての挑戦だったが、予想以上の売れ行きに嬉しい悲鳴を上げていたという。世田谷区にある駒沢工場の生産キャパシティの問題もあるようだが、平日は19時を回る頃には500本を超える食パンを完売していた。店舗は21時まで開けておき、完売後に来店されたお客さまには謝罪した上で予約を受けていた。

しかしこの好調な売れ行きも東京都が3月25日に発表した「感染爆発の重大局面」を契機に流れが大きく変わった。それまで堅調であった食パンの売れ行き



杉本樹弥さん 筆者撮影

は、「週末の外出自粛」という都知事の一声で右肩下がりとなってしまった。それでもコロナ禍で食品販売市場のトレンドとなったテイクアウトブームの後ろ盾は、平日の売り上げをかろうじて維持したものの、週末をサポートするまでとはならなかった。とりわけ日曜祝日には、店頭に用意した食パンの半分以上が売れ残り、週末の休業を余儀なくされている。

「オープンして間もなくは、緊張や不慣れということで店内は何かと気忙しいことが多いが、この閑散期を好機として接客を重視した戦略へ変更した」と店長の杉本樹弥さんは語る。これが功を奏し、リピーターのお客さまが増えているとも付け加えた。そして「天候に左右されない利点が駅ナカにはある。週末を除けばむしろ悪天候の方が好感触の日が多い」とも語ってくれた。駅ナカが持つ魅力を活かして様々な自助努力を重ねていた。

（取材 2020年4月20日）

社会、経済 向き合うジレンマ

4月2日、東京都では僅か1日で2000人の新規感染者が発生した。人口1400万の東京で、感染ルートが分かっている感染者のクラスターによってオーバーシュートが引き起こされたのだ。3月25日、東京都は「感染爆発の重大局面」と銘打って週末の外出自粛を促したが、法的な強制力を伴わないために都民の行動を決定的に変える強いメッセージとはならなかった。

そもそも、中国武漢市や米国ニューヨーク州に見られたような法的な強制力と執行力を伴う都市封鎖は、ウイルス対策としての効果は大きいですが、それゆえ社会的、経済的ダメージも大きくなるというジレンマを抱えている。日本政府が発令した緊急事態宣言はあくまでも努力目標であり、法的な強制力や執行力を持つものではない。これは、経済的なダメージを最小限に抑えながら事態の収束を狙うという、両者を折衷するものだ。しかし、政府や自治体が「週末の外出自粛」や「深夜帯営業時間の縮小」、「休業」などを要請すると、あらゆる領域の経済活動を決定的に停滞させてしまうことが分かった。とりわけ、都市部や繁華街などに構える個人経営の店舗はもちろん、体力のある大手チェーン店ですら経営状態が急激に悪化している。不要不急の外出を控えることは、消費者の購買意欲を極端に抑え込み、経済的そして物理的に閉塞した社会空間を瞬時に創出してしまふのである。

おわりに — パンデミックの収束に向けて —

今次のようなパンデミックによって都市封鎖、解除そして再封鎖がたびたび繰り返されると、社会や経済は確実に破綻していくだろう。憧れを抱くような企業が次々と倒産していき、若者は将来に希望を持てなくなる。さらに公園や体育館、カルチャーセンターなど中高年の人々の憩いの場も長期に渡って失われていくか

らだ。人の心と社会全体が疲弊と混迷の隘路に迷い込むことになるのだ。

筆者は今後のコロナ禍には、高速で回り続けるコマのようなイメージを持っている。

「物事の動きを止めることなく本当の姿を把握することは難しい」と冒頭に記したのはこのためだ。回転を続けるコマは、どのような形をしているのか分からないし、そこに描かれた絵柄も見ることとはできない。今はしっかりと距離を取り、やがて力尽きて止まるのを待つしかない。

幸いにも、新型コロナウイルスは制御することは非常に困難なウイルスだが、一方で人と人との接触機会を減らせば流行を急速に抑制することが出来るという特徴を持っている。新型コロナウイルスというコマが止まりかつての日常が戻った時には、破壊された社会や経済の速やかな再建が求められる。そして「PCR検査体制」や「営業自粛」、「アベノマスク」から「10万円一律給付」に至るまで、この未曾有のパンデミックを収束させるために政府が講じた玉石混淆の対応策を改めて評価しなければならない。

作品短評

自治労文芸 代表幹事

佐藤 環 樹

コロナ禍の選考について

コロナが、既定の物事をここまで覆すのか、と実感させられた。本来、応募を締め切り、速やかに一次選考を行い、本選考へ。遅くとも20年秋には受賞作を決定しなければならぬのに、まるまる一年も先延ばしになってしまった。

真先に、謝罪しなければなら

ないのは、作品を寄せていただいた方々に。コロナ禍にあつて、選考が遅れている事情は察していただいたと思う。しかし、決定が一年も遅くなる事態となったことは、深く反省した

い。以降は、非常時も想定し、決定が遅延することを回避する準備をしておきたいと思う。

さて、コロナ禍にあつて、今年の一斉審査は、書面開催となった。9名の文芸幹事が一堂に会して応募作の批評をすべきだが、それもかなわず、個々の幹事から、推奨する作品を選んで

もらった。推奨された作品の中から、私と野川幹事で議論、そして本部の竹内さんにも助言してもらい、最終的に6本の作品をプロの手に委ねることとした。

なお応募者については、リポート率は比較的高い方であった。投稿いただいた後の書評を載せるようになり、それを参考に、再応募してくれる方もいて、嬉しい限りだ。さらに初めの応募者も、毎回必ずいて、

文芸幹事たちに残された課題はひとつ。いかに、応募数を上昇

させられるかだ。

また傾向として、一人で数本を応募される方が増えている。

サイクルが、一年だったのが二年となり、創作時間が増えたのが要因だろう。同一の筆者なのに、メッセージが同一とは限らず、とても興味深いと感じながら読み進めたことを覚えていく。

結びに、次回作のテーマとして、長いコロナとの共存が、わたしたち自治体職場をどう変えていったのか。私たち自身がどう変わったのか。

自治労組合員、家族、関係者ならではの視点での作品に期待したい。

「葉桜を想う」

文章も上手く、ストーリーの構成もシッカリしていて、最後までスムーズに読み終えた。感性は文章の表現を通して知ることができるとし、標準を超えた域に在るのが分かる。

この作品でクローズアップしてほしいのは、親子間の絆だ。テーマもそこにあるはずだ。親子間の絡みや、過去の確執から現在の解決に至るまでの、言葉のやり取りや心理描写に重点をおくことができれば良かった。

タイトルの「葉桜に想う」は、良くない。作品の顔なので、シンプルが良い。単純に「親子」のほうが作品に寄り添うし、読み終えた後に、タイトルと文章が重なる。

実力のある人なので、次回作に期待したい。

自治労文芸 幹事

野川 義秋

「古里」

「そして自分は自治体職員になった」

主人公・自分は、大学を中退して山間の食品工場で働くようになる。そこでの突然の九州北部豪雨との遭遇と職場における顛末から、そこを辞めて自治体職員として再出発した道程を、記録文学として作品化している。

工場における夜勤を伴う重労働に残業。工場長をはじめ職場の人間関係に押しつぶされそうになった自分が、心療内科に通い「うつ状態」の診断を受けたことにも踏みこんで表現した勇氣ある内容となっている。

大学は何学部だったのか、何の食品工場だったかとか細部を

丁寧に書いて欲しいとの思いを抱いた。また、感情移入した表現が目立つのも気になる。書く行為は自分を見つめ直すことにつながる。ぜひ、これを契機にして書き続けることを期待したい。

「考察 地方公共交通 札幌市電を 事例として」

東京都交通局で働く作者が、札幌市電を取りあげながら地方公共交通について考察している作品である。

概要では、明治期の石切山の石材を運び出す馬車鉄道から、大正期の馬車軌道を経て現在の市電となった歴史を辿っている。そして、北九州市や岐阜市が廃止に追いこまれていった中で、幾度もの困難を克服し、札幌市民の財産として今日に至っていることに着目している。

作者が東京都交通局の職員であることは冒頭で触れた。これは願望としてだが、かつて都電が辿った変遷や都電荒川線などの歴史とか現状についても絡めて展開して欲しかった。そうすれば、札幌市電を切り口にして、全国の市電の有り様も読者に伝える作品になったのではないか。

自治労文芸 幹事

野田 博幸

「神への報告」

神話がモチーフの作品。「人間は不完全だが、だからこそ素晴らしい」というメッセージにうまく繋がっている。物語は「人間は愚か」と言い神の怒りを買って、人間界に落とされた主人公が人間の中で暮らし、ある事件に遭遇し…という形で進んでいく。少し残念だったのが事件に

おける登場人物の言葉や行動をもう少し見直す余地があると感じた。例えば、もっと前の部分に行動につながる伏線を仕込んで置くと良かったのかも知れない。また、主人公や登場人物の思考や行動に共感しきれなかった部分があり、読後に違和感があった。限られたページの中ではなかなか困難かも知れないが、この人物はこのような行動をするのかを詰めるのもっと良かったと思われる。

「鏡人」

不思議な話。テーマは他者からの認知や承認だろう。主人公の一人称で語られるが、前半の記述部分について少しテンポが悪いと感じた。話の流れは面白いので、もっとテンポよく読めることを意識すると良くなると思う。主人公は次々にトラブルに襲われるが、ある出来事を切

っ掛けに、物にも触れず他者から認識されなくなってしまう。

思春期である主人公の心象風景の出来事かと思ったら実際に見えていないようで……と言う形で話は進んでいく。他者から見えなくなっても事件は起こり、ついに主人公を認識し触れることのできる人物が登場する。

話の所々に「倫理のテキスト」が登場し、そのページから、意味深な言葉を紡ぎだすところも面白いと感じた。時々見られる設定の齟齬や辻褄が合わない部分を読み進めるのを阻害するため修正を求めたいが、文章に独特の雰囲気があり、最後まで楽しく読めた。

自治労文芸 幹事

橋本 春樹

「幸せの哲学」

分野としては童話？自由だ。

のびのびしている。楽しみながら書いたのだろう。それが伝わってくる。ところどころ、くす

っと笑いながら読んだ。子どもに読んでほしいので、言葉遣いを修正すれば、もっと良くなる。また、ひとつのエピソードを中心に描いて完結させれば、いくつかの連作として十分に成立するだろう。絵本にすればもっと……などと欲も出てくる。

ひとマスあけなど、基本的なルールはすぐ修正できるので大目に見ることに。予備選考段階は通らなかったが、奨励賞的なものとして推したい作品。童話としては、タイトルは再考願いたい。是非とも次回も応募してください。

「コロナ危機下で働く人々」

このテーマの作品での応募はあると予想していた。これが現

実のことを基にした小説であるとしたら、ルポの方が生々しく書けたのではないだろうか。コロナ禍における専従役員の様子にはよく伝わってきた。ただし、そこには様々な葛藤があったはず。そこにもっと踏み込んでほしかった。散歩のシーンの描写は効果的に挿入されていて、作品に厚みを持たせている。巧い。ただ、残念だったのは、折々の心理描写が物足りなかったこと。そこを丹念に描けば、さらに完成度は増したと思う。厳しい表現をするなら、エピソード集のような構成。描写力のある方なので、状況説明の域を越えることができたはず。危機はまだ続く。続編を読みたいと思う。

「楓」

応募三作中、他の二作が最終に進んだがこれも準じる出来映えだ。力量は一読あきらかで、とつぜん拉致監禁された五十代の「私」が命がけの間答に直面する冒頭から読者をつかんで離さない。それは緊迫した状況や謎の設定だけでなく、六郎さんとの会話の巧みさにも拠っていて、作者は「読ませる」技巧をバランスよく涵養している。こうして「私」は「楓」なる人物専用の図書館で司書を務めるが、楓は最後までそこを訪うこととはない。作者は読み物としての愉しみに力を入れたので、このモラトリアムや「主なき図書館を保守すること」のアレゴリーとしての強度が隠れてしまっ

た感はある。もうすこしコンパクトにする手はあっただろう。

「戻しの杖」

「ヘンゼルとグレーテル」をベースとしゲームアイテム的な「杖」を挿入して、ラップ的なリミックス作品と仕上げたものの。西洋童話の背後に横たわる飢餓や疫病、つまり死のイメージがバックで鳴り続けている。着想はよい。オチもちゃんとついている。応募作中オリジナリティはわりと高く、作者(OB)の年齢を考えると、信じがたい若々しさ、かも？ ただし可読性はひどく低い。会話調(自問自答かもしれないが)でありながらカギカッコさえ使わないので、読者はたいへん苦勞する。読み手の苦勞の半分くらいは作者が担っても罰は当たらないと思うが？

「わたしと出来事のソーシヤル ディスタンス」

「わたしと出来事のソーシヤル ディスタンス」

普段は詩をメインに活動されていらっしゃるのだろうと思います。詩人とは一体どのようなことを考えていて、作品を生み出すのかその一連の工程を大変興味深く見させていただいた。はじめの粗削りな心情描写から一つの詩が出来上がるまで、思考の旅を見せてくれる貴重な作品である。作者の詩には、腹の底から塊のまま勢いよく吐き出すようなエネルギーがある。町田康を連想した。詩が輝いている分、エッセイとしては霞んだように思う。作者はご自身のことを社会情勢に疎いとか成長がない評価されているようだが、

自信を持っていたきたい。

「悪魔の友達」

天使、悪魔、人間、本来そこに上下や優劣はなく、誰の中にも存在し、時や場面によって天使は悪魔に、人間は天使にと、何者にも変わるのだから。作品には、謎かけが取り入れられ、巻末にはもう一つの結末も書き加えており挑戦的な作品である。作者が伝えたいことをすべて詰め込んでしまった感があり、逆に伝えたいことが何なのかぼやけてしまったように思えたので、解釈は読み手に委ねても良かったのではないだろうか。しかし最後まで読むと子ども向けに書かれた作品だったとわかった。

詩歌の部選評

詩の部

山田 隆昭

28回を数える今回は、特に印象に残る時期の自治労文芸賞となりました。2019年末に発生したCOVID-19禍です。そのため、選考の時期が大幅にずれ込み、年明けとなりました。私に関係する詩人団体や同人誌でも、集合しての会議が開けずメールにより行うことが多くなっています。2020年4月頃には、詩人の活動も鈍るのではないかと危惧していました。しかしそれは杞憂に終わりました。詩集は例年と同様に多く出版され、特に優れた第一詩集を多く読むことができました。また、同人誌も着実に発行され、いつものように届けていただき、ともしればくじけそうになる私を励ましてくれました。これからこの気持ち을大切に、詩と取り組もうと思っています。そのような状況の為か、今回は応募作も少なく、寂しい選考となりました。

今回は残念ながら入選はなく、佳作のみ次の二篇を選びました。

佳作「ペンダゴ」齋藤新一（宇都宮市職労退職者）

〃「言の実」半田一緒（北海道・美瑛町職員組合）

「ペンダゴ」は、〃右手の中指〃にペンダゴができた顛末を綴ることで、父親の子どもへの想いを受け止め、ペンダゴとともに大切にしている〃私〃の心情が伝わってきます。〃親父〃は、小学三年の息子に、漢字や九九や諺を繰り返して書かせます。そして〃私〃は言われるままに書き、書き続けることによって、ペンダゴができます。それは、〃すくすくと育ちます。愚直に生きた父親が亡くなっても、ペンダゴは消えません。父親の想いはペンダゴとして残り、〃私〃を励ましています。こうしてペンダゴは単なる物質ではなくなり、父親と見まがう人格を持つ者となります。かつて、私も詩の先輩から、好きな詩人の詩を何度でも書写して、その詩のリズムを身に付けなさいと教えられました。この詩では、繰り返し文字を書くという、得難い体験をとおしてできたペンダゴが、父親の想いの象徴として存在感を示しています。さらにこの詩は、パソコンの普及によって便利さが優先され、手書きの習慣が廃れてゆくことへの警鐘をも孕んでいるように思いました。〃ペンダゴ〃という言葉が、死語となってしまうことを願うばかりです。

齋藤さんはこの詩のほかに、父親の重い言葉をかみしめ、反芻する詩篇『小言』など、父親の年齢を超えようとする今でなければ書けない、年齢の積み重ねによって得られたであろう、味わい深い詩を寄せてくれています。

『言の実』は、自分独自の言葉を紡ぎ出すことの産みの苦し
みと、その実現に向けて努力する、その過程の喜びと充実感を、
“わたし”をリングに喩えて素直に描いています。つまり、タ
イトルの“言の実”とは、“言の葉”と言われるような言葉そ
のものではなく、言葉を発する“わたし”の実態に軸足を置い
ているのです。それがリングの“実”として言い表されていま
す。言葉を生み出すには痛みも伴います。この詩は“未発表
の作品に限りませ”という制約が、重くのしかかる事実から始
まります。冒頭にこの一行を置くことにより、この詩を書く必
然性が導き出されてきます。第一連の“お気に入り”の言葉を
二度と送りだすことが出来ずにいる”というように、気に入
った言葉を何度でも使いたい誘惑は、文芸に携わる者なら誰しも
体験することです。ここから言葉との格闘が始まります。この
詩は、そうした切り口から書き起こそうとしていることに好感
を持ちました。このようなテーマで書くこと、得てして「苦しい、
苦しい」と続けてゆきたくなりがちですが、この詩は違います。
新しい言葉を生み出すために苦しみが伴うのは当然ですが、豊
潤な香りを放つために傷つくことを厭わない、その覚悟のほど
が、静かに表明されています。“わたし、美味しいジュースに
なるよ”と、第三連の“りんごの皮は赤く その実は白いよう
に／わたしの肌は白く その身は赤いのだから”は、はっとす
る発見と発想が、的確な比喩として生かされています。詩は、
独自に発見した事物を、いかに発展させてゆくかが大切で
すが、この詩はそれが出来ています。この調子でずっと詩を書き

続けて欲しいと思いました。

半田さんはこのほかに、独白調の詩を数篇寄せてくれま
した。どの詩も新鮮で、単に素直なだけでなく、少しワサビを効
かせた詩を愉しみました。

そのほかでは、「薄れゆく記憶に」(後藤順・岐阜市職退職者)
は、土地に根差して生きてきた母が亡くなった後、家に現れる
モノノ野の生きものと交流するが、それも交通事故で死んでし
まう。その亡骸を母の庭に戻す。両者の死を体験する中で、時
にはそれを忘れることで、つらい体験をやり過ごすことにもな
ることに気付く。この詩は散文形式で書かれています。詩は必
ずしも起承転結や文脈、また、意味すらも必要としない場合も
ありますが、散文形式だとしても言葉の流れを意識して読
んでしまいません。その流れが少し分かりにくくなっています。
というより、母と野生の生きものの死が、どのような関連があ
るのか、ふたつの出来事のどちらに軸足を置くのが、少し希
薄であるように思いました。複雑なこころの動きを、散文詩の
形式で表現することの難しさを教えられました。散文と詩の違
いが厳しく問われる形式でもあるのでしょうか。

「宇宙船地球号」(まがり優子・大分県本部)は、かけがえ
のない“地球”で共に生きることの大切さを素直に書いていま
す。その向日性はとても良いと思います。ただ、地球上で起こ
る様々な出来事、それはすべてが肯定できるものではないかも
しれません。それらをも露わにすることが、この奇跡の球体
に敬意を表すことにもなるのではないのでしょうか。書こうとす

る対象を、
様々な角度から見る
ことが大切でしょう。

ペンダコ

右手の中指に
大きなペンダコがある
できたのは 小学三年のとき

親父は
物覚えの悪い息子に
何とか自信をつけさせようと
漢字やらカタカナやら
九九やら諺やら

栃木・宇都宮市職労（退職者）

齋藤 新一

同じことを何十回も

何百回も何千回も

(ほかのひとつ覚えのように)

新聞のチラシの裏に書かせ

来る日も来る日も

うんざりするくらい

同じことの繰り返しの大波小波に

叩かれ叩かれ

へとへとになりながらも

それに応えようと

タコは すくすくと

育ち続けた

下手な鉄砲も数打ちゃあたるで

練習を繰り返し返すうちに

どうしたわけか

下手が人並みに
人波が上手になった

「そうら できたじゃないか」という
親父のうれしそうな声に包まれて

「継続は力だ」

時折 タコをさすっていると
なぜか親父の声が さざめく

鉛筆を持ったび

長男である私を

大学に出すために

のべつ幕なしに穴のあいた靴下と
機械油だけの服で過ごした

親父の熱い想いが

タコの肌となって

真っ赤にふくれあがる

ひとつの切なさを忘れるために
うっかりさらにいくつかの切なさを
書き加えてしまっても
タコのくせに
切なさや虚しさなんぞ
どこ吹く風と
ちっとも泣き言をいわず
もう少しがんばるのだと
所有者に物申す

もはやペンダコは ただのタコではなく
新型コロナウイルスの恐怖におびえて
中指と人差し指との谷間に
隠れこもうともしないし
我が物顔で

私の中指の爪の左側後方に

定住する

ゆるぎない一人前の存在だ

光のみえない

入退院を繰り返したあげく

三十年前 末期の肺がんで亡くなった親父は

今なお

愚直で 寡黙な

かくしゃくとした

還暦のペンダコとなって生き続け

私には

捨てたくても

捨てられない

タコである

言の実

“未発表の作品に限ります”

その御仕着せで

なんども繰り返したいお気に入りの言葉を

二度と送り出すことが出来ずにいる

新しい言葉を生みだすため

ほんの些細な悪意の隙間から

そっと透明なナイフを取りだそう

北海道・美瑛町職

半田 一 緒

(りんごの皮は赤く その実は白いように
わたしの肌は白く その身は赤いのだから
艶々とした曲線にするように
奥深く、肉体に刺しいれることも厭わない)

わたし、まだ瑞々しく若いから
世界に触れたところから傷ついてしまう
ぐずぐずに熟れて、涙が溢れる

(フレッシュ・ジュースの作り方知ってる？
頭のとっぺんから爪先まで順々に切り崩し
ていくの。砕いて踏み躪って。そうして熟
れた内側だけが香り立つ)

無垢な果実は
傷つくことを求められている

鮮やかに拍動する生まれたての苦しみを

わたし、美味しいジュースになるよ

美食家^{グルメ}な大人たちに供するため

誰かが置き去りにしたナイフを持って

じっと傷つく時を待っている

刺しこまれたところから

まだ知らない言葉が溢れるのを、じっと

短歌の部

森川多佳子

入選は米谷茂さんの「日常」三十首。米谷さんの魅力は眼の良さである。誰もが「あらっ」と思うけれど、見過ごしてしまふような場面や光景、人間の在り方を感度抜群の眼で捉え、的確に描写する。ユーモアあり、ペーソスありで、読後感が明るいのは、この混沌の時代にたいせつな資質だと思う。

満月を見ようと窓を開け放つ五分間だけ塾の講師は

落胆の声を背に受け流鏑馬の若武者キリリと二の矢を絞る満月がだいぶ昇った夜。受験をひかえ緊張感が増してきた教室か。疲れの見える生徒達に、五分だけでも月を見せようと窓を開ける塾講師の心情が童話のように美しい。現代的な場面にやわらかな口語の抒情が生まれる。二首目。映像でよく見る場面だが、「落胆の声を背に受け」から歌が始まり、若武者の精神の緊張感が結句に集約される。歌の展開の巧みな二首である。

掃除機は分解修理できるのに口下手だけは未だ直せない

禁酒せし友は入れ歯を焼酎のお湯割りグラスに沈めて寝ると

押しボタン信号の前に五人居て誰も押さずに一分過ぎる

機械は修理できても自分の性格は直せない私。禁酒して、もう飲まない焼酎を入れ歯の消毒に使う友。信号機の前で遠慮し

あう五人。どれも面白く思わず笑ってしまいが、そこには人間の哀感や感情の機微が底流し、可笑しみを深くしている。

ポール立て道路計画の測量は良き米つくる田を二分する秀歌だと絶賛されし詠者とはA Iだったで夢から覚める

「田を二分する」に強引な力に抵抗できない無念と痛ましさがある。A I短歌はまさに今の旬の題材だ。時代や社会への懷疑的な視線があり、家族を励まし共感し、地域の子供や新入社員へ送る温かい視線もある。総体としての作者を伝える一連である。

鈴木照夫さんの「除外例なく」三十首は、斎藤茂吉の「晝の薄明に死をおもふことあり除外例なき死といへるもの」を踏まえての題。茂吉が明と暗が交錯する晝に死を思ったように、作者も生や死を考えて詠んだ作品であるという言挙げなのだろ

う。
友の中あひだ有過ぐるも空も地も静かあと幾人いくどを送らせたまふや友が逝き四十九日が過ぎた。親しいものを見送って、やがて自らの死をむかえる。「せたまふ」は使役の尊敬表現。天とか神仏とか、なにか人間を超える大きな存在によって自分が生かされ、人を見送るのだと感じているのだろう。静謐な老境の歌である。

ひと重咲へきのコスモス咲かせ独り住みの隣家は冬の蜂を寄らしむ

デザイナービスの見学自由の貼り紙をしばし目に止め踵を返す

「ひと重咲きのコスモス」と「冬の蜂」のひっそりとした命の背後にそれらを「咲かせ」「寄らし」めている独居の隣人がいる。寂しく、つましく、心ゆかしい生が顯ってくる良歌だと思ふ。

二首目は、そろそろデイサービスに通ってもいいかと思ひ、もう暫く後でもいいかと思ひ返す微妙な心理。へ確かなる行く先のあるは力強し雁はためらふ者を置き去りへは北帰する雁の生や種の存続への根源的な意志の厳しさを思わせて印象に残った。

山崎俊定さんの「柘榴の実」三十首は全編植物に溢れている。

帰省子の帰り静かな庭よしと胡麻の実乾す手が戻ってきた

よ

初実りのトマト完熟いまだしもきゅあきゅあ磨き亡き妻に

捧ぐ

日の匂いむんずと掴んで稲の実を頬に感じし若き日を恋う
柘榴、花欄、柿などの木の実、亡き妻から引き継いだ畑に作る胡麻、瓢箪、トマト、西瓜。そしてここは時空を超えて故郷の田畑や母や姉の思い出に飛び、過去と現在を往還する。一つひとつの草木に心を寄せて観察し、しっかりとした写真のなかに安易な感傷に陥らない骨太の抒情が通底している。懸命に生きる植物や虫への共感のゆえだろう。亡き妻や子への愛情も深い。

山田裕子さんも「思い出」三十首で頑張られた。

手タレ真似マニキュア塗るも決まらない爪の短い看護師だ

もの

病む人の命の傍に佇んで生きた軌跡の深さにふれる

髪を上げ白衣に着替え深呼吸 儀式を終えて看護師になる
一連の後半にある看護師としての歌には説得力があり、印象に残る。「佇む」「ふれる」という言葉の謙虚さが、患者さんの生死をかけた闘病の軌跡とそれを見守る作者の心の深さを感じさせる。作者のこれからの短歌にとって、職場詠は大切な領域になると思うので、丁寧な詠み深められることをお勧めしたい。家族や植物や友を詠んだ日常の歌は事実の奥に感情の動きがあり、魅力的なフレーズもあるが、読者に伝わりにくい表現も散見される。抒情の淡い調べやイメージの広がりは山田さんの美質なので、それを大切にしながら、表現としての言葉を探し磨いてほしい。

今回は若い方、新しい方の応募があつて喜ばしい。歌の数が少ないので選外となったが、ご紹介したい。

近くまで来たから寄ると言う俺に何も聞かない母のおかえり
中川 潔

だいじょうぶ独りで米は研げますと見送る母の笑顔がしみる
百年目皆で祝えずメーデーも自粛支える仕事に追われ

来線 ▲のほりくら△も乗らないで ラインの人を待っている夜

桐原則介

コロナ禍に生きる困難感ずれどメールに届く友の温もり未
来線 ▲のほりくら△も乗らないで ラインの人を待っている夜

半田一緒

母となり土筆煮嫌う子に我をかさねて気付く亡き祖父の想
い

飯野美裕

。文法の間違いなど少し直しました。ご了承ください。コロナ
に負けず歌を作ってください。次回を楽しみにしています。

日常

掃除機は分解修理できるのに口下手だけは未
だ直せない
禁酒せし友は入れ歯を焼酎のお湯割りグラス
に沈めて寝ると
押しボタン信号の前に五人居て誰も押さずに
一分過ぎる
親の背は子が巢立ちゆく滑走路霧深きかな未
だ反抗期
落胆の声を背に受け流鏑馬の若武者キリリと

大阪・泉野市職（退職者）

米谷
茂

二の矢を絞る

野仏にランドセル三つ背負わせてれんげ咲く
田に兎ら春相撲

ポール立て道路計画の測量は良き米つくる田
を二分する

満月を見ようと窓を開け放つ五分間だけど塾
の講師は

食堂に新入社員固まれば花の開花のごとき明
るさ

秀歌だと絶賛されし詠者とはAIだったで夢
から覚める

除外例なく

黙もたしたるままに梅園巡り来て何鳥か鳴くを振り返りみる

友の中ちゆう有過ぐるも空も地も静かあと幾人いくたりを送らせたまふや

デイサービスの見学自由の貼り紙をしばし目に止め踵を返す

冬鳥はいくつの別離に会ふならむくはくはと一羽池いへを離れて

ひと重咲へきのコスモス咲かせ独り住みの隣家

東京・都庁職（退職者）

鈴木 照夫

短歌

は冬の蜂を寄らしむ

職のことも薄らぎて来ぬ運河沿ひの半里ばかりを水見て戻る

確かなる行く先のあるは力強し雁はためらふ者を置き去り

腹立たしきは大方おおかた己れの因にして支離滅裂なこの老癩性を

柘榴の実

胡麻の実の弾け散るさま瞠目のバツタなおな
お大き目見開く

帰省子の帰り静かな庭よしと胡麻の実乾す手
が戻ってきたよ

裏山より朝露匂う風入りて実りの瓢箪揺らし
何處へいづく

初実りのトマト完熟いまだしもきゅあきゅあ
磨き亡き妻に捧ぐ

まゆみの実数珠玉となり色づきぬわびしき村

東京・都庁職
(退職者)

山崎 俊定



短歌

を豊とよけく飾かざる
日の匂いむんずと搦なんで稲の実を頬ほに感じし
若き日を恋う
真まっ赤あかに実るゴーヤの瓜は掌てに余あるどう飾かろ
うか旧盆の棚

短歌
奨励賞

思い出

目隠しして空気を探るその先にあなたを見つ
けた私の手は
花びらのひとつひとつを眺めおりミカンの房
のような大菊
身支度をしながら聞いている星占い気分上々さ
そり座一位
手タレ真似マニキュア塗るも決まらない爪の
短い看護師だもの
病む人の命の傍に佇んで生きた軌跡の深さに

富山・市立砺波総合病院労組

山田 裕子

短歌

ふれる

髪を上げ白衣に着替え深呼吸 儀式を終えて

看護師になる

前をゆく足跡追って急接近 融雪装置にとけ

てゆく距離

無機質な子ども部屋から聞こえる爪を切る

音のちある音

俳句の部

小沢 信男

桐原則介氏を入選とします。俳句はとかく老人の慰みと見られ、それはそうでもありませんが。そもそもは芭蕉のこのかた、眼前の事態としっかり向きあうのが俳句だ。ただいまの世相と取り組んだ時事句が、けっこう明るい。活力のある句風に、敬意を表します。マスクは冬の季語ながら、もはや通年ですね。春闘から薄暑へ、そしてなおも。

瀬角龍平、光平朝乃、山崎俊定の三氏は、ともに本欄のご常連で、さすがの力量です。とりわけ山崎氏とは、お会いもしないが長い付き合いです。投稿者名を伏せて、作品本位で入選その他を決めてから見ると、山崎氏をまたも入選にしていた。ということもございました。大先輩として後進に譲っていただいで選外へ。

一句一句に向き合えば、それぞれにくっきりと味わいがあります。桐原氏の「橋のたもとの戦災碑」は、隅田川畔にもあるが、福井市にもあるのだな。七十六年前の日本戦災地図が偲ばれます。瀬角氏の「廃校蛇口生きてゐる」も、意外な発見のようで笑える。淋しくもある。錯綜する心情ですね。光平氏「追悼ミサに孫娘」七十六年を跨ぐ継承が、世代を越えてもあるのでした。山崎氏、カッコウとホトトギスはまことに似よった叫び声で。そして「嬰兒は神と同じ眼」なのですな、身の引き

縮まる思いです。保久上氏「線路に揺るる土筆」にわが児との来し方を偲んで。山崎尚子氏「風花」はちらちら舞う小雪で冬の季語。労わりの想いをこめて。

それぞれに、眼前の事象から時代を越え、地理を跨ぎもして。この自在が俳句なのですな。

自治労文芸とおつきあひも、じつに長いことです。金子兜太氏がお元気に俳句の選者をされているところに、私は小説の選者の一人でした。皆様の作品から多々学んできたことを、しみじみ思い返します。これにて引退。本欄も一氣に若返ってください。ありがとうございます。

※選者の小沢信男さんにおかれては、2021年3月3日、永眠されました(享年93歳)。1987年から自治労文芸の俳句の部の審査員を務められました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

2020年春から夏へ

ウイルスに仕事奪われ春炬燵
マスク越し表情読むや今春闘
今日メーデー旗もコールも人もなく
感染のリスク背負うや汗光る
マスク着け職場のオルグ薄暑かな
夕焼けや橋のたもとの戦災碑

福井・福井地方労組

桐原 則介

つまらないバツタ

噴煙は地底の力こぶ春だ
春立つや廃校蛇口生きてゐる
春疾風船に吸ひ付くタグボート
蝮擲つ男をその後恐れけり
置去りの故郷に父と蠅叩

鹿児島・垂水市職（退職者）

瀬角 龍平

無題

砂利船に路を譲りて春の鴨
駅に待つ父母ありし帰省かな
投下時をしめすサイレン原爆忌
長崎忌追悼ミサに孫娘

大阪府・自治労枚方市職員関係労組

光平朝乃

無題

「あばよ」「またね」友と春とに別れる夜
こだましてかっこうと共鳴ほととぎす
じっと見る嬰兒は神と同じ眼で
ふるさとはあの大夕焼の先の先

東京・都庁職（退職者）

山崎 俊定

無題

縁台の足ぶらぶらと遠花火
子の発てり線路に揺るる土筆かな

鹿児島・垂水市職員労組（退職者）

保久上 光昭

無題

薫風や隣家の少年大人びて
畑じまい風花降りし夫の肩

長野・長野県組合員家族

山崎 久子

川柳の部

島田 駱舟

前回同様八名の方の作品が寄せられました。しかし、今回は三十句が三名、十八句が一名、十五句が一名、十三句が一名、十句が二名と、前回を大幅に上回る句数が集まりました。多作は作家にとって大切な資質です。寡作な作家もいますが、作家はいろいろな内容の作品を提示し、自分の世界をより広い読者層に伝えることが物書きの使命と私は考えています。その意味で、今回の十句以上の応募作品ばかりだったことに、応募者の意欲を強く感じています。

川柳は「詠む」より「吐く」と表現されることがよくあります。「吐く」とはもちろん作者の思いを表現することです。これは川柳家に限らず、作家としての基本的な創作エンジンかと思えます。「吐く」ものが無くして小説も短詩文芸もあり得ません。しかし、川柳は口語体で作家の訴えを読者に伝えたい、という思いが他のジャンルの作家よりも強いために「吐く」という表現が使われるかと思われれます。今回の作品からも、「吐く」が伝わってきました。行儀よく詠んだ内容は読者の感動を呼びますが、「吐く」ことで感動に加え、共感を得られるのが川柳ではないかと思っています。

入選には綿谷夕雨子さん（今別町）の「凧の海」を推薦しました。透明感を出す言葉の選び方が魅力的でした。心象句の作

品群ですが、作品のイメージが得られやすい作りになっています。心象句は作者の思いを強く「吐く」ために難解句になりがちです。それは作者の思いが作品に凝縮されてしまうからで、凝縮は作者がこだわる言葉に込められ、情念に絡め取られてしまい伝達性が弱くなることも多くなります。

その点、綿谷さん言葉の組み合わせに工夫し、思いを「吐き」ながら情念に絡め取られないように言葉を選んでいきます。その結果情念に流されずに、作者の思いが読者に受け渡される仕組みになっています。

中には「絡み合う秋の終りを解いてみる」というやや分かりにくい作品もあります。「絡み合う秋の終り」をどう解釈してよいか難しいでしょう。私は自然の秋の終わりとは捉えず、人間関係や人生の秋として、冷静になって考えることが大切な時期がある、と解釈しました。これが作者の思いと違っていても構わないでしょう。要は読者が解釈できる範囲での表現であると考えます。従って、全体的に分かりやすい内容になっていると言えるでしょう。

また、作品の柔らかさを演出しているのも言葉の組み合わせです。硬い漢語を使っているも、一句を通して読み下すと漢語の硬さが薄められています。心象句にありがちな重い「吐く」とは遠い、弾む思いの「吐く」感覚で詠まれているのではないのでしょうか。この弾むイメージが言葉を選ばせ、透明感や柔らかさの演出に一役買っているものと思えます。読後に残る爽快感が入選の背を押しました。

佳作は三篇いただきました。佳作①は柳谷たかおさん（外ヶ浜町職員組合）です。前回は佳作で選ばれています。柳谷さんの作品はタイトルから始まっています。前回の選評にも書きましたが、作品群の鑑賞ポイントを指し示しています。今回は「いつか土」。これは最後に置かれた作品の上五をそのまま使ったものですが、一連の作者の暮らしを表現しながら、結局人間に行く先は決まっているから今を謳歌したい、という感慨を伝えたいのではないのでしょうか。言ってみれば「全ての作品はタイトルに通ず」でしょうか。

今回も柳谷さんの作品群は自分を観察した内容が中心ですが、前回よりも人間臭さが満ちています。それは第三者がかなり登場するためです。人間は第三者が入ったり、複数になれば様々な感情が発生します。善し悪しは別にして、その感情は自分を育てるエネルギーとなり、創作のエンジンともなります。今回の作品からエンジン音が響いて来ます。作品によっては第三者は人間ではなく猫であったり、鉛筆であったりしますが、感情のやりとりが伝わってきます。感受性の豊かな柳谷さんならではの世界が広がっています。

佳作②は中川潔さん（福山県庁職員組合 退職者）です。「ほほえみ」のタイトルで連作十五句です。タイトルにマッチした明るい作品が並んでいます。川柳はどちらかと言うと皮肉を効かせた内容が多いのですが、中川さんの作品群は「ほほえみ」のオンパレードで川柳作品集としては少数派です。しかし、読者には楽しく好感の持てる内容です。

川柳は人を笑わせる内容がよい、という意見が川柳界には多いのですが、人を笑わせるのではなく、作者自身が笑う作品があって当然と私は考えています。しかし、意外に作者が笑う作品は少ないのですが、中川さんはそれを実行しています。しかも日常の言葉を使い、内容がそのまま伝わってくる読み易さがあります。文学は伝わってこそ文学、と私は考えます。

連作や群作でここまで作者が笑っている作品は並べられません。作者が笑えば読者が癒される、と中川さんの作品群はそれを証明しています。これも川柳の持つ力です。

佳作③は田中良積さん（釧路市役所ユニオン 退職者）です。田中さんは前回が入選でした。前回より作品の内容が悪かったわけではありません。言葉のコントロールも十分で、説得力のある内容であることは変わりません。前回と「比較すると社会的な内容の作品数が減っていることくらいです。

今回の作品群では自分に引き付けて詠んだものが増えました。作家として自分を観察する視線は大切ですからこれはこれで結構です。しかし、同時に川柳では他社との関係を詠むのも大事な要素です。他者が人間とは限りません。もう少し自身の外側の世界とのやりとりが私は欲しかったです。

また、タイトルをはじめとし、「無題」を詠んだ作品を冒頭と最終に置き続けているこだわりは分かりますが、「無題」の世界から移動して詠むことも期待しています。

凧の海

凧の海小さな寢息抱きしめて
透明でいたい空を映す海
モカ香る記憶の中の海にいる
海鳴りが飛び込んできた三号車
染まってもいい夕陽の赤ならば
夕暮れの海で私が閉じていく
群衆の先頭に立つ雨蛙
群衆の木霊大きな風になる
王道をまっすぐに行く蟻の群
天空の道を探して乗った雲

満月に檻を飛び出す白兔
一度だけ同化しました濃いブルー
覚悟して花のトンネル抜けて闇
ままならぬこの世で爪を研いでいる
待ちぼうけ止むことのない小糠雨

青森・今別町職（退職者）

綿谷 夕雨子

万華鏡痛む心で見た軌跡
神様と対話した日の青い空
跪く天が遠くになりそうで
煩惱に出会ってしまいう月明り
まやかしの明日に出会う昼の月

生きたいと発芽続けている地球
天を突く火柱になる民の声
薔薇なんか散ってしまえと別離の日
悲しみの海に浮かべる薔薇千本
撫の森みんな滴になっっていく
絡み合う秋の終わりを解いてみる
音もなく私を消した白い雪
仮設住宅また陽が昇る陽が沈む
流されて辿り着くのは母の海
夜の虹いつか見たいと目を凝らす

いつか土

青森・戸ヶ浜町職（退職者）

柳田 たかお

春よ来いと僕の時計は速くなる
新緑に拉致されている鳥と僕
秋色になるまで秋の中にいる
冬陽射す中で余命を考える
進む進む雪の音色を聴きながら
薪燃える語り合いたい人がいる
無垢だった青春だった走ってた
天皇と同年で頑張ります
ふるさとのために汗かく夢を描く
落ち武者の里です僕の先祖です
高い高いしたなあ幸せだったなあ
へのへのもへじ笑わせるまで描きました
せせらぎのように怒りを話したら
静寂が好きで山びこ大好きで
あの日まで確かに風が見えていた

手が空けばせせせとつくる紙吹雪
本当に七色なのか見てる虹
淋しさを繕う十二色の糸
図書館で天使のような娘と出会う
痛くないですかと鉛筆を削る
くれないの丘にオルゴールを連れて
夕焼けを見るたび同じ猫と遭う
北極星君もポツンと一軒家
未婚率増加匂いの無いレモン
もらい泣きしているそんな人が好き
忘れよう明日は今日より素晴らしい
二礼二拍 大地に風に太陽に
乾杯は満月昇るまで待って
荷を下ろす全て美談にして下ろす
いつか土思う存分生きてみる

ほほえみ

ほほえみという名の色で描くあした
微笑めばやさしい風が吹いてくる
花束のような笑顔をくれる人
微笑んでしまうあなたがいるだけで
やわらかな光が射してくる手紙
ほほえみを浴びて綺麗に咲きました
あきらめず続けて見えてきた景色
笑顔しかさしあげられるものがない
七人の敵が磨いてくれた貌
生きてきてよかった今日の青い空
微笑んできみと夕日になりました
もういない人の笑顔が目にしみる
ほほえみの杖でわたしも同じ道
感謝してさいごの笑顔をさし上げる
ほほえみを残して散っていくいのち

福井・福井県職（退職者）

中川

潔

無題

北海道・釧路市役所ユニオン（退職者）

田中良積

連綿と描き続ける無題の絵

モノクロの記憶の中の影絵たち

底を這うだけの魚であったかも

許された過去へ男は負を背負い

人間の森にも慈雨という情け

あの時の別れのままである美学

その先は言うまい虹をなくすから

少年となって佇む広い海

座を持たすそんなピエロのひとりです

風さらり墨絵の街を通り抜け

辞書の森ふらり邂逅文字に逢い

若き日に燃えたほむらの蒼い色

空蟬の家か此処にも彼処にも

空虚さを埋める言葉を探す辞書

生かされて結び直してみる命

じょんがらの世界死を舞い生を舞い

解き放つように鶴折る千の罪

くずれても愛のかたちという形

幾星霜似た顔吊す家系の譜

夕焼けの浜辺ひとりのエキストラ

一滴の情に溺れる未完成

ゆっくりと命つくろいながら生き

幾つもの人の匂いの橋渡る

仮の世に飽くまで戯画の中で生き

五線譜に休符もあった生きるうた

泣いてまた満たす心にある水位

水かげん湯かげん母の唄になり

無骨な手離すな妻よ深い森

哲学の道で孤影を深くする

フィナーレのうしろ姿にある無題

2020 まんが大笑

テーマ
「門(ゲート)」

審査員
佐々木ケンさん

1968年、東京大学入学。1968年東大マンガクラブ発足時のメンバー。機関紙「じちろう」に漫画リーダーを掲載。

「2020まんが大笑」のテーマは「門(ゲート)」。機関紙・誌への既発表作品を含め、全国から48点の応募があった。審査は7月13日に行われ、「大笑」には黒川前東京高検検事長とマージャン用語をかけた作品を描いた高橋誠さん(鹿児島)が受笑。このほか「アイデア笑」や「うまいで笑」など、合計13作品が受笑した。

【総評】

2020 大笑選評

コロナ禍の下、自治労本部でなく自宅に応募作のコピーを送ってもらい審査を行いましたので、いつも増して私独断の選考になりましたが悪しからず。

高橋さんの黒川前東京高検検事長の絵は見事ですが、アイデア的にはマージャン用語のだけなのでそれを知らない人には「？」でしょう。が、私は高校あたりからマージャンをやっていたので全応募作中、一番笑えました。そこで独断で大笑としましたので悪しからず。

アイデア笑では、テーマの「門」と月曜日の英語の短縮形MONとの語呂合わせを臆面もなく日付のどアップで表した表現上のアイデアで松本さん。話題のオリンピックに突飛なアイデアを出し、「しらん」のセリフが可笑しい渡部さん。それと非常口の向こう側が明るくなくやっぱりコロナ世界(という意味でいいので

しょうか?)で、コロナから逃げる術がないという絵の大西さん。

うまいで笑は、同じ語呂合わせのアイデアだった井家さんと仲澤さん。井家さんはヒトコマ漫画系の絵のうまさ、仲澤さんはほのぼのかわいい系の絵のうまさ。もう一人の吉本さんは、しっかりと絵で選びましたが、自分は大丈夫と思いついて動き回る若者への皮肉が入っていたらさらに良かったかと。

ヨッシー・イリエさん、喜多さん、澤井さんのお三方は、それぞれ持ち味を出した政治風刺漫画ですが、アイデアや表現の仕方などもう少し工夫があればということでもう少笑。

自治体職員としての苦勞を描いた大植さん、金正恩の似顔絵がユニークな相澤さん、そして自治労組合員の家族の方らの応募との情報から、そういう方々の漫画活動への激励の意味で塚本さん、以上お三方は報道笑としました。

新型コロナウイルス対応で皆さん大変ですが、漫画のユーモアと批判精神を忘れずがんばってください。

大笑

にぎり専門・店

鹿児島・県本部書記局職員労働組合(退職者)

高橋 誠



うまいで笑

門KEY

石川・県職員労働組合

井家 利之



うまいで笑

門を開くことができるのは…!

群馬・前橋市役所職員労働組合

仲澤 結絵



うまいで笑

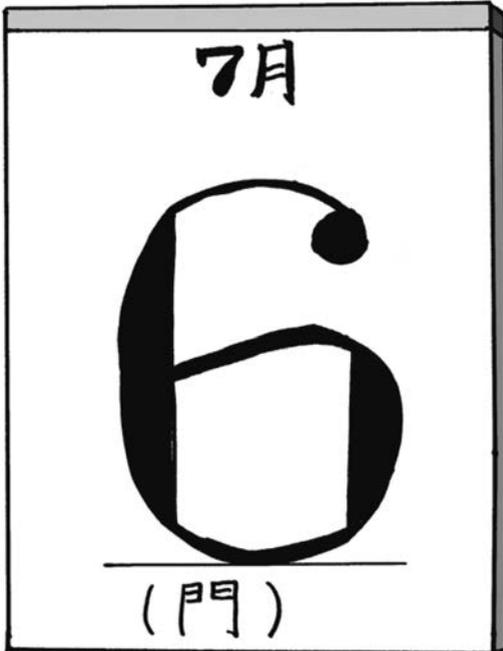


ステイホーム

広島・尾道市職員労働組合

吉本 和弥

アイデア笑



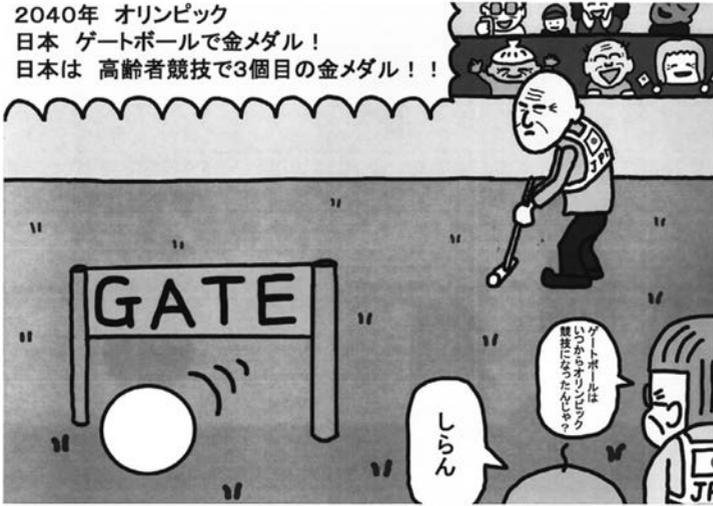
月曜日(MON)

愛知・県本部直属支部

松本 高德

アイデア笑

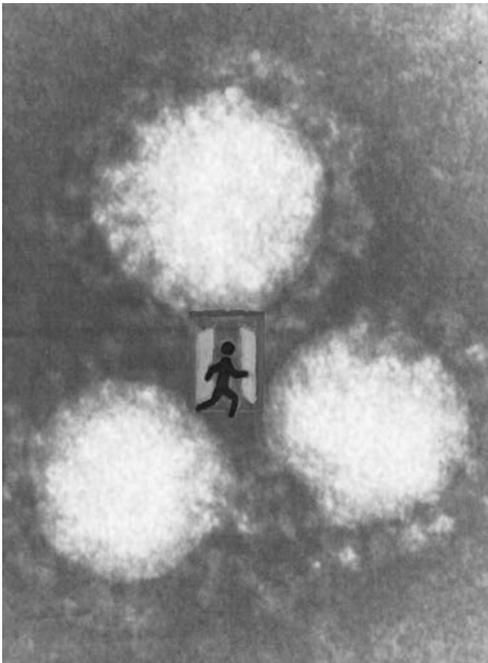
2040年 オリンピック
日本 ゲートボールで金メダル！
日本は 高齢者競技で3個目の金メダル！！



オリンピックも高齢化

千葉・国民健康保険団体連合会
職員労働組合 渡部 統明

アイデア笑



入るのか？出るのか？

兵庫・県職員労働組合(退職者)
大西 英剛

もう少笑

門外不出のはずが…

兵庫・明石市職員労働組合(退職者)

澤井 康樹



もう少笑

アベに増苦

愛知・県本部

ヨッシー・イリエ



もう少笑

問題は…

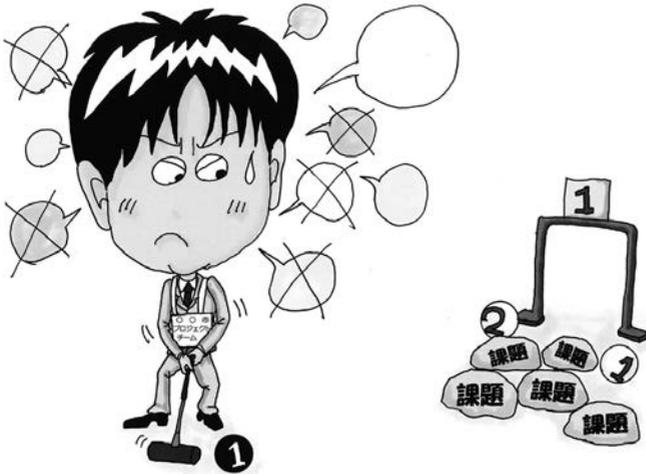
大阪・自治労大阪府職員関係労働
組合(退職者) 喜多 眞生



報道笑

このゲートを突破するには…

兵庫・豊岡市職員労働組合
大植 賢



報道笑

テポドンだも〜ん!

新潟・十日町市職員労働組合連合会
(退職者) 相澤 まさこ子



報道笑

動物愛護週間

大阪・自治労枚方市職員関係労働組合
(組合員家族) 塚本 吉典



自治労文芸会議運営要綱

(名称)

第一条 この組織は、自治労文芸会議(以下「会」とよぶ)という。

(目的)

第二条 この会の目的は次のとおりである。

一、自治労県本部や単組の文芸サークルの創作活動を支援すること。

二、組合員(組合員の家族と元組合員を含む)に作品発表と批評の場を提供すること。

三、組合員に文芸活動に関する情報を提供すること。

(活動)

第三条 この会は前条の目的を達成するために次の事項に取り組む。

一、機関誌「自治労文芸」に関すること。

二、自治労文芸賞に関すること。

三、自治労の各種報道媒体への組合員の作品掲載に関すること。

四、「会報」等による、文芸サークルや作品の紹介に関すること。

五、文芸にかかわる講演会や研究会に関すること。

六、連合の各単産の文芸サークルとの交流、および他団体との協力連携に関すること。

七、その他、会の目的を達成するために必要な活動

(機関)

第四条 前条の活動をすすめるため、この会に幹事会と事務局をおく。

一、幹事会は年一回以上開催し、会の重要事項について審議する。

二、事務局は自治労総合企画総務局(東京都千代田区六番地1番)におき、会の日常事務を処理する。

(役員)

第五条 この会に次の役員をおく。

(1) 代表幹事(1名)

(2) 副代表幹事(1名)

(3) 幹事(若干名)

(4) 事務局長(1名)

幹事は各地連1名選出を原則とする。代表幹事は幹事の互選によるものとする。

幹事の任期は2年とし、再選を妨げない。

事務局長は自治労総合企画総務局長が担当する。
役員は会の構成員として、諸活動の企画、機関誌編集等を分担する。

(費用)

第六条 この会の活動に要する費用は、自治労本部の支出金、機関誌発行に伴う収益金、寄付金などでまかなう。

第七条 この運営要綱の改廃は幹事会の審議を経おこなう。

(附則)

第八条 この運営要綱は2004年6月5日から適用する。

この運営要綱は2011年11月18日から適用する。

この運営要綱は2015年12月1日から適用する。

以上

自治労文芸

第29号

2021年9月30日

発行
編集

自治労総合企画総務局
自治労文芸会議

〒102-8464 東京都千代田区六番町1

TEL(03)3263-0273

印刷

株式会社 広報ブレイス

自治労出版物 のご案内

自治労の自治研活動から
全国に広まった制度・政策
現在多くの自治体で実施している「こみの分別収集」
「急病人の休日・夜間診療」は、自治労の自治研活動
から実現した制度です。

定価◎838円(本体762円+税10%)
年間定期購読料◎8,184円
(本体7,440円+税10%)

1959年5月20日創刊(第1号) 2021年7月20日発行(第915号) 発行所: 自治労出版センター
発行: 自治労のゆたかな社会
月刊自治研9 2021
vol.63 no.744



まちの
実例が
ここに
ある

お申し込みは自治研ホームページからできます
<http://www.jichiro.gr.jp/jichiken/>
♪自治研 Facebook ページははじめました♪
<https://www.facebook.com/jichirojichiken>

1959年5月20日創刊(第1号) 2021年7月20日発行(第915号) 発行所: 自治労出版センター
発行: 自治労のゆたかな社会
月刊自治研8 2021
vol.63 no.743



1959年5月20日創刊(第1号) 2021年7月20日発行(第915号) 発行所: 自治労出版センター
発行: 自治労のゆたかな社会
月刊自治研7 2021
vol.63 no.742



お申し込みは

(株)自治労サービス 自治労出版センター

〒102-0085 東京都千代田区六番町1 自治労会館6F

TEL. 03-3263-2023 FAX. 03-5213-5485

その他出版物は自治労のホームページから
購入できます

<http://www.jichiro.gr.jp>

幸せは、ひとりじゃつukれない。



住まいる共済

火災共済・自然災害共済

風水害等給付金付火災共済・自然災害共済・借入賠償責任共済

こくみん共済 NEWS
coop

5120B031

あなたの
住まいの保障 **火事**のとき**だけ**では?



台風

豪雨

洪水

地震

のときの
保障なら

自然災害共済

大型タイプ



火災のときの保障があっても、風水害や地震の保障があるとは限りません。
加入している保険や共済に風水害や地震の保障があるかを点検してみましょう。

自然災害共済は、火災共済に付帯してご利用いただく共済です。

不明な点があれば、まずは組合にご連絡ください。

こくみん共済 **〈全労済〉** 全国労働者共済生活協同組合連合会

自治労共済 推進本部

全日本自治体労働者共済生活協同組合

契約にあたってはパンフレットをご覧ください。

「こくみん共済 coop」は営利を目的としない保障の生協として共済事業を営み、相互扶助の精神にもとづき、組合員の皆さまの安心とゆとりある暮らしに貢献することを目的としています。この趣旨に賛同いただき、出資金を払い込んで居住地または勤務地(先)の共済生協の組合員となることで各種共済制度をご利用いただけます。